

第一號 平和條約及附屬規定書
第一條 平和條約及附屬規定書
第二條 平和條約及附屬規定書
第三條 平和條約及附屬規定書

第四條 平和條約及附屬規定書
第五條 平和條約及附屬規定書
第六條 平和條約及附屬規定書
第七條 平和條約及附屬規定書

第八條 平和條約及附屬規定書
第九條 平和條約及附屬規定書
第十條 平和條約及附屬規定書
第十一條 平和條約及附屬規定書

第十二條 平和條約及附屬規定書
第十三條 平和條約及附屬規定書
第十四條 平和條約及附屬規定書
第十五條 平和條約及附屬規定書

第十六條 平和條約及附屬規定書
第十七條 平和條約及附屬規定書
第十八條 平和條約及附屬規定書
第十九條 平和條約及附屬規定書

第二十條 平和條約及附屬規定書
第二十一條 平和條約及附屬規定書
第二十二條 平和條約及附屬規定書
第二十三條 平和條約及附屬規定書

第二十四條 平和條約及附屬規定書
第二十五條 平和條約及附屬規定書
第二十六條 平和條約及附屬規定書
第二十七條 平和條約及附屬規定書

第二十八條 平和條約及附屬規定書
第二十九條 平和條約及附屬規定書
第三十條 平和條約及附屬規定書
第三十一條 平和條約及附屬規定書

第三十二條 平和條約及附屬規定書
第三十三條 平和條約及附屬規定書
第三十四條 平和條約及附屬規定書
第三十五條 平和條約及附屬規定書

第三十六條 平和條約及附屬規定書
第三十七條 平和條約及附屬規定書
第三十八條 平和條約及附屬規定書
第三十九條 平和條約及附屬規定書

第四十條 平和條約及附屬規定書
第四十一條 平和條約及附屬規定書
第四十二條 平和條約及附屬規定書
第四十三條 平和條約及附屬規定書

第四十四條 平和條約及附屬規定書
第四十五條 平和條約及附屬規定書
第四十六條 平和條約及附屬規定書
第四十七條 平和條約及附屬規定書

第四十八條 平和條約及附屬規定書
第四十九條 平和條約及附屬規定書
第五十條 平和條約及附屬規定書
第五十一條 平和條約及附屬規定書

第五十二條 平和條約及附屬規定書
第五十三條 平和條約及附屬規定書
第五十四條 平和條約及附屬規定書
第五十五條 平和條約及附屬規定書

第五十六條 平和條約及附屬規定書
第五十七條 平和條約及附屬規定書
第五十八條 平和條約及附屬規定書
第五十九條 平和條約及附屬規定書

第六十條 平和條約及附屬規定書
第六十一條 平和條約及附屬規定書
第六十二條 平和條約及附屬規定書
第六十三條 平和條約及附屬規定書

第一節 平和條約及附屬議定書

第一款 平和條約及附屬議定書

發生シタル政治的事件ト明ニ關係スルモノニ付夫々一般的ニシテ且完全ナル大救ヲ行フヘシ

第二款 平和條約及附屬議定書

大救ニ關スル宣言第一ハ希臘國政府カ希臘國及土耳其國間ノ戰爭中ニ於ケル軍事上ノ義務ニ違反シタル事實ニ付其ノ軍隊ニ所屬シ又ハ所屬シタル非回教信徒國民ヲ逐シ去ルノ權利ヲ妨ケサルモノトス

第三款 平和條約及附屬議定書

大正十二年七月二十四日「ローザンヌ」ニ於テ之ヲ作成ス

第四款 平和條約及附屬議定書

大正十二年七月二十四日「ローザンヌ」ニ於テ之ヲ作成ス

第一節 平和條約及附屬議定書

第一款 平和條約及附屬議定書

大正十二年七月二十四日「ローザンヌ」ニ於テ之ヲ作成ス

第二款 平和條約及附屬議定書

大正十二年七月二十四日「ローザンヌ」ニ於テ之ヲ作成ス

第三款 平和條約及附屬議定書

大正十二年七月二十四日「ローザンヌ」ニ於テ之ヲ作成ス

第四款 平和條約及附屬議定書

大正十二年七月二十四日「ローザンヌ」ニ於テ之ヲ作成ス

第七輯 外事 第一章 平和條約及附屬議定書

第一節 平和條約及附屬議定書

第一款 平和條約及附屬議定書

大正十二年七月二十四日「ローザンヌ」ニ於テ之ヲ作成ス

大正十三年八月十六日
日本帝國及關係各國ト共ニ大正十二年七月二
十四日西國「ローザンヌ」ニ於テ署名シタル
「平和條約」ニ海峽制度ニ關スル條約、「トラ
リス」國境ニ關スル條約、「居住及裁判管轄」
ニ關スル條約、「通商條約」、「ローザンヌ」ニ
於テ署名セラルタル文書中一定ノ規定ニ對シ
ル白耳義國及葡萄牙國ノ加入ニ關スル議定
書、「カラガツチ」ノ領域及「インプロス」島
及「アネドス」島ニ關スル議定書、「千九百二十
八年八月十日「セーベル」ニ於テ主權同盟國及
希臘國ニ締結セラレタル希臘國ニ於ケル少
數民族ノ保護ニ關スル條約ニ關スル協定日附
以テ同盟國ニ締結セラレタル「トラリス」ニ
關スル條約ニ關スル議定書及「セルビア」國
「イリコ」國ノ署名ニ關スル議定書
大正十二年十一月二十三日佛蘭西國「バ
リ」ニ於テ日本帝國及關係各國ト共ニ署名シタル
「希臘國以外ノ同盟國國民カ土耳其國ニ於
テ希臘國以外ノ同盟國國民ノ賠償及賠償ニ關
スル條約」及「羅馬尼亞國ノ前記條約ニ對シテ署名
ノ權限ニ關スル議定書」本年八月十六日
「巴里」ニ於テ日本帝國及關係各國ノ批准書ヲ
シテ第一回批准書ヲ作成セリ

於テ署名シタル「平和條約」、「海峽制度ニ關ス
ル條約」、「トラリス」國境ニ關スル條約、「居
住及裁判管轄ニ關スル條約」、「通商條約」、「ロ
ーザンヌ」ニ於テ署名セラルタル文書中一定
ノ規定ニ對シテ白耳義國及葡萄牙國ノ加入ニ
關スル議定書及「カラガツチ」ノ領域及「イン
プロス」島及「アネドス」島ニ關スル議定書ノ
各批准書ヲ、又英帝國及伊太利國ハ本年八月
六日「巴里」ニ於テ署名シタル「平和條約」、「海峽制度ニ關スル條約」、「
トラリス」國境ニ關スル條約、「居住及裁判管轄
ニ關スル條約」、「通商條約」、「ローザンヌ」ニ
於テ署名セラルタル文書中一定ノ規定ニ對シ
ル白耳義國及葡萄牙國ノ加入ニ關スル議定
書、「カラガツチ」ノ領域及「インプロス」島
及「アネドス」島ニ關スル議定書及「千九百二十
八年八月十日「セーベル」ニ於テ主權同盟國及
希臘國ニ締結セラレタル希臘國ニ於ケル少
數民族ノ保護ニ關スル條約ニ關スル協定日附
以テ同盟國ニ締結セラレタル「トラリス」ニ
關スル條約ニ關スル議定書及「羅馬尼亞國
國民カ土耳其國ニ於テ希臘國以外ノ同盟國
國民カ土耳其國ニ於テ希臘國以外ノ同盟國
國民ノ賠償及賠償ニ關スル條約」及「羅馬尼亞國
ノ前記條約ニ對シテ署名ノ權限ニ關スル議定
書」ノ各批准書ヲ夫々「巴里」ニ於テ寄託セリ

- 大正十三年八月十六日
- 一、加拿大
 - 二、澳大利亞
 - 三、「メキシコ」島
 - 四、「ノルフォーク」島
 - 五、「ニューギニア」委任統治地域
 - 六、南阿非利加聯邦
 - 七、西南阿非利加委任統治地域
 - 八、斐洲自由國
 - 九、印度
 - 十、「タンザニヤ」島
 - 十一、「モーリス」島
 - 十二、「バハマス」島
 - 十三、「シヤラルタル」島
 - 十四、「シエラレオン」島
 - 十五、「フィジー」島
 - 十六、「ギルバート」及「エリス」諸島殖民地
 - 十七、「ソロモン」諸島英帝國保護領及西太
平洋高級委員ノ管轄下ニ在ル其ノ他
ノ諸島
 - 十八、「トング」島
 - 十九、「バヌア」島
 - 二十、「ベチニアナラント」保護領
 - 二十一、「スワジランド」島
 - 二十二、北極「ロヂア」島
 - 二十三、英埃共同領「スーダン」
 - 二十四、「ノルウエー」委任統治地域

第二號表
一、南阿非利加聯邦
二、西南阿非利加委任統治地域
三、斐洲自由國
四、愛蘭自由國
五、「バハマス」島
六、「シヤラルタル」島
七、「シエラレオン」島
八、「フィジー」島
九、「ギルバート」及「エリス」諸島殖民地
十、「ソロモン」諸島英帝國保護領及西太平
洋高級委員ノ管轄下ニ在ル其ノ他ノ諸島
十一、「トング」島
十二、「バヌア」島
十三、「ベチニアナラント」保護領
十四、「スワジランド」島
十五、北極「ロヂア」島
十六、英埃共同領「スーダン」
十七、海峽殖民地
十八、「ノルウエー」委任統治地域

希臘國ハ本年二月十一日「ロザンヌ」ニ於テ
「平和條約」ニ關スル條約、「海峽制度ニ關スル
條約」、「居住及裁判管轄ニ關スル條約」、「通商條
約」、「ローザンヌ」ニ於テ署名セラルタル文書
中一定ノ規定ニ對シテ白耳義國及葡萄牙國ノ
加入ニ關スル議定書、「カラガツチ」ノ領域及
「インプロス」島及「アネドス」島ニ關スル議定
書、「千九百二十年八月十日「セーベル」ニ於
テ主權同盟國及希臘國ニ締結セラレタル
希臘國ニ於ケル少數民族ノ保護ニ關スル條約
ニ關スル協定日附以テ同盟國ニ締結セラレ
タル「トラリス」ニ關スル條約ニ關スル議定書
及「セルビア」國「イリコ」國ノ署名ニ關スル
議定書」ノ各批准書ヲ、土耳其國ハ
本年三月三十一日「ロザンヌ」ニ

本年八月六日「巴里」ニ於テ「ローザンヌ」會議
條約ノ平和條約及其ノ他ノ諸文書ノ第一回批准
書ヲ作成セリ又「英帝國」及「英帝國」通過條約
ヲ其ノ第十六條ニ基キ左記第一號表ニ於ケル
自治領及屬地ニ、又居住條約ヲ其ノ第十九條ニ
基キ左記第二號表ニ於ケル自治領及屬地ニ夫々
適用セラルコトヲ聲明セリ

- 大正十三年八月十六日
- 一、加拿大
 - 二、澳大利亞
 - 三、「メキシコ」島
 - 四、「ノルフォーク」島
 - 五、「ニューギニア」委任統治地域
 - 六、南阿非利加聯邦
 - 七、西南阿非利加委任統治地域
 - 八、斐洲自由國
 - 九、印度
 - 十、「タンザニヤ」島
 - 十一、「モーリス」島
 - 十二、「バハマス」島
 - 十三、「シヤラルタル」島
 - 十四、「シエラレオン」島
 - 十五、「フィジー」島
 - 十六、「ギルバート」及「エリス」諸島殖民地
 - 十七、「ソロモン」諸島英帝國保護領及西太
平洋高級委員ノ管轄下ニ在ル其ノ他
ノ諸島
 - 十八、「トング」島
 - 十九、「バヌア」島
 - 二十、「ベチニアナラント」保護領
 - 二十一、「スワジランド」島
 - 二十二、北極「ロヂア」島
 - 二十三、英埃共同領「スーダン」
 - 二十四、「ノルウエー」委任統治地域

希臘國以外ノ同盟國國民カ土
耳其國ニ於テ被リタル戰爭ニ
因ル損害ノ賠償及賠償ニ關ス
ル條約及羅馬尼亞國ノ同條約
ニ對シテ署名ノ權限ニ關スル
議定書 大正十三年八月十六日

希臘國以外ノ同盟國國民カ土耳其國ニ於テ
希臘國以外ノ同盟國國民ノ賠償及賠償ニ關
スル條約」及「羅馬尼亞國ノ前記條約ニ對シテ署名
ノ權限ニ關スル議定書」本年八月十六日
「巴里」ニ於テ日本帝國及關係各國ノ批准書ヲ
シテ第一回批准書ヲ作成セリ

希臘國以外ノ同盟國國民カ土耳其國ニ於テ
希臘國以外ノ同盟國國民ノ賠償及賠償ニ關
スル條約」及「羅馬尼亞國ノ前記條約ニ對シテ署名
ノ權限ニ關スル議定書」本年八月十六日
「巴里」ニ於テ日本帝國及關係各國ノ批准書ヲ
シテ第一回批准書ヲ作成セリ

希臘國以外ノ同盟國國民カ土耳其國ニ於テ
希臘國以外ノ同盟國國民ノ賠償及賠償ニ關
スル條約」及「羅馬尼亞國ノ前記條約ニ對シテ署名
ノ權限ニ關スル議定書」本年八月十六日
「巴里」ニ於テ日本帝國及關係各國ノ批准書ヲ
シテ第一回批准書ヲ作成セリ

希臘國以外ノ同盟國國民カ土耳其國ニ於テ
希臘國以外ノ同盟國國民ノ賠償及賠償ニ關
スル條約」及「羅馬尼亞國ノ前記條約ニ對シテ署名
ノ權限ニ關スル議定書」本年八月十六日
「巴里」ニ於テ日本帝國及關係各國ノ批准書ヲ
シテ第一回批准書ヲ作成セリ

希臘國以外ノ同盟國國民カ土耳其國ニ於テ
希臘國以外ノ同盟國國民ノ賠償及賠償ニ關
スル條約」及「羅馬尼亞國ノ前記條約ニ對シテ署名
ノ權限ニ關スル議定書」本年八月十六日
「巴里」ニ於テ日本帝國及關係各國ノ批准書ヲ
シテ第一回批准書ヲ作成セリ

希臘國以外ノ同盟國國民カ土耳其國ニ於テ
希臘國以外ノ同盟國國民ノ賠償及賠償ニ關
スル條約」及「羅馬尼亞國ノ前記條約ニ對シテ署名
ノ權限ニ關スル議定書」本年八月十六日
「巴里」ニ於テ日本帝國及關係各國ノ批准書ヲ
シテ第一回批准書ヲ作成セリ

希臘國以外ノ同盟國國民カ土耳其國ニ於テ
希臘國以外ノ同盟國國民ノ賠償及賠償ニ關
スル條約」及「羅馬尼亞國ノ前記條約ニ對シテ署名
ノ權限ニ關スル議定書」本年八月十六日
「巴里」ニ於テ日本帝國及關係各國ノ批准書ヲ
シテ第一回批准書ヲ作成セリ

希臘國以外ノ同盟國國民カ土耳其國ニ於テ
希臘國以外ノ同盟國國民ノ賠償及賠償ニ關
スル條約」及「羅馬尼亞國ノ前記條約ニ對シテ署名
ノ權限ニ關スル議定書」本年八月十六日
「巴里」ニ於テ日本帝國及關係各國ノ批准書ヲ
シテ第一回批准書ヲ作成セリ

第七條

一、本條約之必要ナル證據ヲ命スル手続規則ハ左ノ原則ニ遵據スルコトヲ要ス

二、訴訟當事者ハ覺書及反對覺書ヲ提出スルコトヲ要シ且答辯書及辯駁書ヲ提出スルコトヲ要ス一方カ口頭ヲ以テ意見ヲ提出シ又ハ提出セシムルコトヲ申請スルコトキハ相手方ニ對シテモ同様ノ場合右ノ手續ヲ爲スコトヲ得ル權利ヲ保留シ右申請ヲ許可スヘシ

三、裁判所ハ審理、文書ノ提出及鑑定ヲ命ジ、證據搜索ヲ爲シ、一切ノ參考資料ヲ要求シ、一切ノ證人ノ陳述ヲ聽取シ且當事者又ハ其ノ代理人ニ口頭又ハ書面ヲ以テ一切ノ辯明ヲ爲スコトヲ請求スルコトヲ得

四、本條約ニ別段ノ規定アル場合ヲ除ク外前記裁判所ノ判定ニ依リ與ヘラレ且違隔又ハ不可抗力ノ理由ニ依リ特ニ正當ト認メラレタル特別ノ許可アルニ非サレハ前記裁判所ノ設置後六月ノ期間滿リ後ハ何等ノ請求ヲ爲スコトヲ許サザルヘシ

五、裁判所ハ事件ノ迅速ナル進捗ヲ保障スル爲ニ必要ナル期間ノ數ヲ指定保持スルコトヲ要ス但シ一年間ニ總計八週間ヲ超過セザルニ限リ之ヲ在ラス

六、事件力必要トスル場合ニ於テ爲シ口頭辯論及一切ノ場合ニ於テ爲シ口頭辯論ハ公列廷ニ於テ之ヲ行フモノトス

七、各混合仲裁裁判所ハ事件ノ進捗上有益ト認ムル場合ニ於テハ裁判所所在地ノ外ニ於テ一閱又ハ數回開廷スルコトヲ得ヘシ

九百九十六條

一、各國政府ハ其ノ委任シタル混合仲裁裁判所ノ審判員並一切ノ代理人及書記ノ報酬ヲ支持スヘシ

二、審判員及書記局長ノ報酬ハ關係國政府ニ於テ合意ヲ以テ之ヲ決定ス右ノ報酬及裁判所ノ一般ノ費用ハ兩國政府之ヲ折半シテ支持スヘシ

九百九十七條

一、本條約ニ別段ノ規定アル場合ヲ除ク外本條約ニ依リ混合仲裁裁判所ノ審判員並一切ノ代理人及書記ノ報酬ヲ支持スヘシ

九百九十八條

一、本條約ニ別段ノ規定アル場合ヲ除ク外本條約ニ依リ混合仲裁裁判所ノ審判員並一切ノ代理人及書記ノ報酬ヲ支持スヘシ

九百九十九條

一、本條約ニ別段ノ規定アル場合ヲ除ク外本條約ニ依リ混合仲裁裁判所ノ審判員並一切ノ代理人及書記ノ報酬ヲ支持スヘシ

スル千九百九十五年六月七日ノ條約

五、一九〇三年七月十六日ノ條約

六、蘇士運河ノ自由使用ヲ保障スル制度ノ設定ニ關スル千八百八十八年十月二十九日ノ條約但シ本條約第十九條ノ特別規定ヲ留保ス

七、萬國郵便聯合ノ條約及取極(千九百二十年十一月三十日馬德里ニ於テ署名セラレタル條約及取極ヲ含ム)

八、千八百七十五年七月二十二日(十日)聖彼得堡ニ於テ署名セラレタル萬國電信條約一九〇八年六月十一日里斯本ノ萬國電信會議ニ於テ改正セラレタル萬國電信條約書附屬國際業務規則及國際料金表

九、一九〇一年一月二十三日海牙ニ於テ署名セラレタル海牙條約

十、一九〇一年一月二十三日海牙ニ於テ署名セラレタル海牙條約

十一、一九〇一年一月二十三日海牙ニ於テ署名セラレタル海牙條約

十二、一九〇一年一月二十三日海牙ニ於テ署名セラレタル海牙條約

十三、一九〇一年一月二十三日海牙ニ於テ署名セラレタル海牙條約

十四、一九〇一年一月二十三日海牙ニ於テ署名セラレタル海牙條約

十五、一九〇一年一月二十三日海牙ニ於テ署名セラレタル海牙條約

署名セラレタル附屬條約及千九百十四年附屬條約

一、千九百十九年九月十日「サン、ジエルマン、アン、レイイ」ニ於テ署名セラレタル阿弗利加ニ於ケル火酒類取締ニ關スル條約

二、千九百十九年九月十日「サン、ジエルマン、アン、レイイ」ニ於テ署名セラレタル千八百八十五年二月二十六日「伯林」ニ於テ署名セラレタル千九百二十年七月二日「ブダペスト」ニ於テ署名セラレタル條約

十三、航空法規ニ關スル千九百十九年十月十三日ノ條約但シ千九百二十年五月一日ノ議定書ノ適用ニ依リ土耳其國カ其ノ地理上必要トスル例外ヲ認メラレタル場合ニ限リ之ヲ適用ス

十四、千九百十六年九月二十六日「ベルン」ニ於テ署名セラレタル條約

十五、一九〇一年一月二十三日海牙ニ於テ署名セラレタル海牙條約

十六、一九〇一年一月二十三日海牙ニ於テ署名セラレタル海牙條約

十七、一九〇一年一月二十三日海牙ニ於テ署名セラレタル海牙條約

十八、一九〇一年一月二十三日海牙ニ於テ署名セラレタル海牙條約

十九、一九〇一年一月二十三日海牙ニ於テ署名セラレタル海牙條約

二十、一九〇一年一月二十三日海牙ニ於テ署名セラレタル海牙條約



滿洲國ニ於ケル日本國臣民ノ居住及滿洲國ノ課
稅等ニ關スル日本國滿洲國間條約締結ノ件

右謹テ裁可ヲ仰ク

昭和十一年四月十七日

內閣總理大臣廣田弘毅



內閣

外甲二六

四月十七日裁可

昭和十一年四月十七日

内閣書記官長

内閣書記官



内閣總理大臣 **齋**

法制局長官 

外務大臣

齋

陸軍大臣

齋

文部大臣

齋

逓信大臣

齋

内務大臣

齋

海軍大臣

齋

農林大臣

齋

鐵道大臣

齋

大藏大臣

齋

司法大臣

齋

商工大臣

齋

拓務大臣

齋

別紙内閣總理大臣及外務大臣請議滿洲國ニ於ケル日本國臣民ノ居住及滿洲國ノ課稅等ニ關スル日本國滿洲國間條約締結ノ件ヲ審查スルニ右ハ相當ノ儀ト思考ス依テ請議ノ

法制局

通閣議決定セラレ可然ト認ム

指令案

滿洲國ニ於ケル日本國臣民ノ居住及滿洲國ノ課稅等ニ關スル日本國滿洲國間條約締結ノ件請議ノ通

四月十七日指令

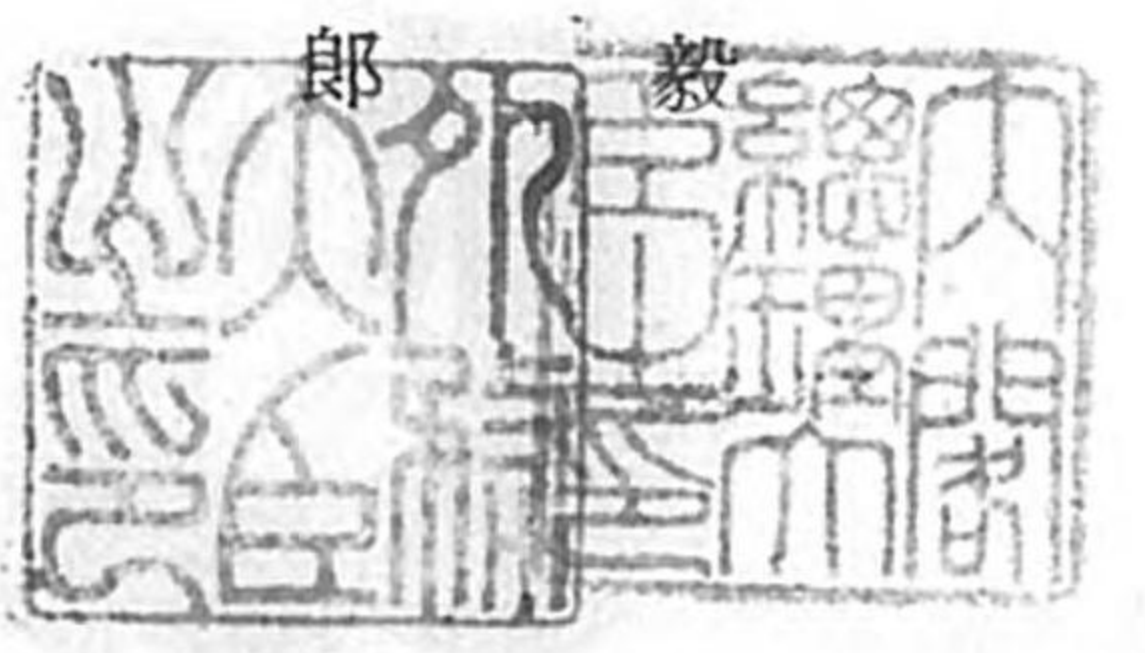
條二機密第二一三號

昭和十一年四月十五日

内閣總理大臣 廣田 弘

外務大臣 有田 八郎

内閣總理大臣 廣田 弘毅 殿



滿洲國ニ於ケル日本國臣民ノ居住及滿洲國ノ課稅等ニ關スル日本國滿洲國間條約締結ノ件
本件ニ關シ別紙ノ通閣議決定相成様致度右及請議候也

外甲 二六

外務省

11.8

滿洲國ニ於ケル日本國臣民ノ居住及滿洲國ノ課稅等ニ關スル日本國滿洲國間條約締結ノ件

滿洲國ニ於ケル帝國ノ治外法權ノ撤廢及南滿洲鐵道附屬地行政權ノ調整乃至移讓ニ關シテハ客年八月九日閣議決定ノ次第アル處爾來右閣議決定ニ基キ種々研究ノ結果先ヅ滿洲國ニ於ケル日本國臣民ノ居住及各種權利利益ノ享有ヲ確保スルト共ニ滿洲國ノ課稅、産業等ニ關スル法令ヲ日本國臣民ニ適用シ且南滿洲鐵道附屬地ニ施行スルコトヲ承認スルコトニ付滿洲國ト條約ヲ締結スルヲ適當ト認メ右ニ關シ別紙「滿洲國ニ於ケル日本國臣民ノ居住及滿洲國ノ課稅等ニ關スル日本國滿洲國間條約」案ヲ得タルニ付テハ日滿兩國間ニ大要右案文ノ如キ條約ヲ締結スルコトトシ之ガ爲在滿植田大使ヲシテ滿洲國

11.8

外務省

極秘

滿洲國ニ於ケル日本國臣民ノ居住及滿洲國ノ
課稅等ニ關スル日本國滿洲國間條約案

日 准 令 日 乙 十 二 百 十 五 十 號 附 錄 五 五 五 二 號 滿 蒙

當局ト交渉セシムルコトト致度

外務省

は(イ)

滿洲國ニ於ケル日本國臣民ノ居住及滿洲國ノ
課稅等ニ關スル日本國滿洲國間條約案

大日本帝國政府ハ昭和七年九月十五日調印ノ日本國滿洲國間議定書ノ趣旨ニ據リ滿洲國ノ健全ナル發達ヲ促進シ且日滿兩國間ニ現存スル緊密不可分ノ關係ヲ永遠ニ鞏固ナラシムル爲現ニ日本國ガ滿洲國ニ於テ有スル治外法權ヲ漸進的ニ撤廢シ且南滿洲鐵道附屬地行政權ヲ調整乃至移讓スルコトニ決シタルニ因リ

滿洲帝國政府ハ右日本國政府ノ決定ヲ多トスルト共ニ之ニ對應シテ日滿兩國臣民ノ滿洲國領域内ニ於ケル融合發展ヲ確保増進スルノ必要ナルヲ認メタルニ因リ
兩國政府ハ日本國ガ滿洲國ニ於テ有スル治外法權及南滿洲鐵道附屬地行政權ニ關シ先ヅ日本國臣民ノ居住及各種權利利益ノ享有竝ニ滿洲國ノ課稅、產業等ニ關スル法令ノ適用ニ付左ノ通協定セリ

第一條

日本國臣民ハ滿洲國ノ領域内ニ於テ自由ニ居住往來シ農業、商工業其ノ他公私各種ノ業務及職務

ニ從事スルコトヲ得ベク且土地ニ關スル一切ノ權利ヲ享有スベシ
日本國臣民ハ滿洲國ノ領域内ニ於テ一切ノ權利ノ享有及利益ノ享受ニ關シ滿洲國臣民ニ比シ不利
益ナル待遇ヲ受クルコトナカルベシ

第二條

日本國臣民ハ滿洲國ノ領域内ニ於テ本條約附屬協定ノ定ムル所ニ從ヒ同國ノ課税、産業等ニ關ス
ル行政法令ニ服スベシ
南滿洲鐵道附屬地ニ在リテハ日本國政府ハ前項ノ滿洲國法令ガ本條約附屬協定ノ定ムル所ニ從ヒ
屬地的ニ施行セララルコトヲ承認ス
本條ノ適用ニ關シ日本國臣民ハ如何ナル場合ニ於テモ滿洲國臣民ニ比シ不利益ナル待遇ヲ受クル
コトナカルベシ

第三條

前二條ノ規定ハ之ヲ法人ニ適用シ得ル限リ日本國法人ニ適用スルモノトス

第四條

本條約ノ規定ハ日滿兩國間ノ特別ノ約定ニ基ク特定ノ日本國ノ臣民又ハ法人ノ權利、特權、特典

及免除ニ影響ヲ及ボサザルモノトス

第五條

本條約ハ昭和十一年七月一日即チ康德三年七月一日ヨリ實施セララルベシ

第六條

本條約ノ正文ハ日本文及漢文トシ日本文本文ト漢文本文トノ間ニ解釋ヲ異ニスルトキハ日本文本
文ニ依リ之ヲ決ス

右證據トシテ下名ハ各本國政府ヨリ正當ノ委任ヲ受ケ本條約ニ署名調印セリ

昭和 年 月 日即チ康德 年 月 日新京ニ於テ本書ニ通ヲ作成ス

滿洲帝國駐劄大日本帝國特命全權大使
滿洲帝國外交部大臣

附屬協定案

本日滿洲國ニ於ケル日本國臣民ノ居住及滿洲國ノ課稅等ニ關スル日本國滿洲國間條約ニ署名スルニ當リ兩國全權委員ハ左ノ通協定セリ

第一條

滿洲國政府ハ從來日本國臣民ノ有スル商租權ヲ其ノ内容ニ應ジ土地所有權其ノ他ノ土地ニ關スル權利ニ變更スル爲速ニ必要ノ措置ヲ執ルベシ

第二條

條約第二條ノ規定ニ依リ日本國臣民ノ服スベキ滿洲國ノ課稅、産業等ニ關スル行政法令ノ範圍及其ノ適用ノ體様ハ豫メ滿洲帝國駐劄大日本帝國特命全權大使ト滿洲帝國外交部大臣トノ間ニ協議決定セララルベシ

前項ノ規定ニ依リ日本國臣民ノ服スベキ滿洲國法令ニ付滿洲國政府ニ於テ重要ナル變更ヲ加ヘントスルトキハ日本國臣民ガ滿洲國ノ裁判管轄權ニ服スルニ至ル迄豫メ滿洲帝國駐劄大日本帝國特命全權大使ノ承認ヲ經ベシ

本條第一項ノ規定ニ依リ條約實施後直ニ協議決定セラルベキ滿洲國法令ハ概ネ田賦、契稅、營業稅、法人營業稅、出產糧石稅、木稅、鑛業稅、鑛業登錄稅、酒稅、捲菸稅、統稅、商業登記稅及地方稅ニ關スル課稅法令竝ニ工業所有權、度量衡、計量、鑛業、市場、畜產、金融及專賣ニ關スル行政法令ニ限ラルベシ

滿洲國政府ハ前項ニ掲グル諸稅中營業稅及法人營業稅竝ニ地方稅中房捐及戶別捐ヲ日本國臣民ニ課スルニ當リテハ條約實施後當分ノ内豫メ滿洲帝國駐劄大日本帝國特命全權大使ト滿洲帝國外交部大臣トノ間ニ協議決定セラルル所ニ從ヒ輕減稅率ヲ適用スベク地方稅中營業稅附加捐ハ右輕減稅率ニ依ル稅額ヲ基準トスベシ但シ條約實施後直ニ適用スベキ輕減稅率ハ營業稅、戶別捐及個人ニ賦課スル房捐ニ付テハ原稅率ノ四分ノ一タルベク法人營業稅及法人ニ賦課スル房捐ニ付テハ原稅率ノ三分ノ一タルベシ

第三條

條約第二條ノ規定ニ依リ日本國臣民ノ服スベキ滿洲國法令ノ日本國臣民ニ對スル適用及執行ニシテ司法手續ニ依ルベキモノハ日本國臣民ガ滿洲國ノ裁判管轄權ニ服スルニ至ル迄日本國領事官ニ於テ之ヲ行フモノトス

前項ノ場合ニ於テハ日本國領事官ハ領事裁判ノ一般準則ニ從ヒ滿洲國當該法令ヲ適用スベシ但シ右法令ニ掲グル刑ノ中有期徒刑トアルハ懲役又ハ禁錮、拘役トアルハ懲役若ハ禁錮又ハ拘留、罰金トアルハ罰金又ハ科料、罰鍰又ハ過怠金トアルハ過料ト看做シテ之ヲ適用スベシ
本條ノ規定ニ依リ罰金、科料、過料又ハ沒收ノ言渡アリタル場合ニ於テ其ノ罰金、科料、過料又ハ沒收物ハ滿洲國政府ニ歸屬スベシ

第四條

日本國政府ハ別ニ滿洲國政府ト協定スル所ニ從ヒ遲クトモ昭和十二年十二月三十一日即チ康德四年十二月三十一日迄ニ滿洲國領域内ニ於ケル行政警察ヲ撤廢又ハ移讓スベク右撤廢又ハ移讓ニ至ル迄ハ條約第二條ノ滿洲國法令中課稅ニ關スルモノ及特ニ南滿洲鐵道附屬地ニ於ケル行政警察ト關係アルモノハ同附屬地ニ施行セラレザルベシ右ノ特ニ南滿洲鐵道附屬地ニ於ケル行政警察ト關係アル法令ノ範圍ハ豫メ滿洲帝國駐劄大日本帝國特命全權大使ト滿洲帝國外交部大臣トノ間ニ協議決定セラルベシ
滿洲國政府ハ前項ノ規定ニ鑑ミ其ノ警察制度ヲ整備スベク且關係日本側施設及職員ノ引繼ニ付必要ナル準備ヲ爲スベシ

日本國政府ハ南滿洲鐵道附屬地ニ於ケル行政警察ノ移讓ニ至ル迄同附屬地内外ニ於ケル日本國臣民ノ課稅上ノ負擔均衡ヲ確保スル爲條約實施ノ日ヨリ滿洲國ガ日本國臣民ニ課スル國稅ト成ルベク同様ノ課稅ヲ同附屬地ニ於テ實施スベシ

滿洲國政府ハ日滿兩國政府ガ別ニ協定スル所ニ從ヒ南滿洲鐵道附屬地ニ於ケル南滿洲鐵道株式會社ノ土木、教育、衛生等ニ關スル施設ノ處理ヲ經タル後ニ非ザレバ同附屬地ニ於テ地方稅ヲ課セザルベシ

第五條

條約第二條ノ規定ニ依リ滿洲國法令ガ南滿洲鐵道附屬地ニ施行セラルト同時ニ滿洲國政府ハ豫メ滿洲帝國駐劄大日本帝國特命全權大使ト滿洲帝國外交部大臣トノ間ニ協議決定セラルル所ニ從ヒ關係日本側施設及職員ヲ右施行當時ノ狀態ニ於テ引繼グベシ

第六條

條約第二條ノ規定ニ依リ日本國臣民ノ服スベキ滿洲國法令ニ關スル滿洲國當該官憲ノ行政處分ニ對シ日本國臣民ニ於テ不服アルトキハ滿洲國政府ハ之ガ救正ニ付適當ナル措置ヲ講ズベシ

第七條

本協定ノ條項ニ從ヒ滿洲帝國駐劄大日本帝國特命全權大使ト滿洲帝國外交部大臣トノ間ニ協議決定セラレタル事項及滿洲國政府ガ同大使ノ承認ヲ經タル事項ハ夫々日滿兩國ノ官報ニ公示セラルベシ

第八條

本協定ハ條約ト同時ニ實施セラルベシ

右證據トシテ兩國全權委員ハ本協定ニ署名調印セリ

昭和 年 月 日即チ康德 年 月 日新京ニ於テ

滿洲帝國駐劄大日本帝國特命全權大使
滿洲帝國外交部大臣

滿洲國ニ於ケル日本國臣民ノ居住及滿洲國ノ課稅等ニ
關スル日本國滿洲國間條約及附屬協定ニ關スル日滿兩
國全權委員間了解事項

第一、條約第一條ニ付

未開放地ニ於テ日本國臣民ガ土地ニ關スル權利ヲ取得スル場合ニハ滿洲國當該官憲ノ許可ヲ
要スルモノトス

第二、條約第二條ニ付

- 一、滿洲國政府ハ滿洲國領域内ニ於テ現ニ日本人居留團體ガ日本國臣民ノ教育事業ヲ經營シ
居ルノ事情ニ鑑ミ滿洲帝國駐劄大日本帝國特命全權大使ト滿洲帝國外交部大臣トノ間ニ協議
決定セララル所ニ從ヒ日本國臣民ノ教育事業ニ要スル費用ヲ毎年分擔スベシ
- 二、滿洲國政府ハ現行租稅制度ヲ更ニ整備スベシ
- 三、滿洲國政府ハ條約第二條ノ規定ニ依リ日本國臣民ノ服スベキ滿洲國法令ノ適用ニ當リ日本
國臣民ガ日本國法令又ハ慣行ニ依リ現ニ享受スル權利又ハ利益ノ保護ニ付必要ナル措置ヲ講

ズベシ

第三、附屬協定第四條ニ付

南滿洲鐵道附屬地内ニ於テ生産セラレ同附屬地外ニ於テ消費セララル物品及同附屬地外ニ於テ生産セラレ同附屬地内ニ於テ消費セララル物品ニ對スル消費税ノ賦課徴收ニ關シテハ日滿兩國當該官憲間ニ於テ協議決定スベシ

昭和 年 月 日即チ康德 年 月 日新京ニ於テ

滿洲帝國駐劄大日本帝國特命全權大使

滿洲帝國外交部大臣

極秘

107

交
換
公
文
案

(昭和十一年四月十三日 印刷)

IMT 637

300

942 051

交換公文案

(往翰)

以書翰啓上致候陳者本日署名ノ滿洲國ニ於ケル日本國臣民ノ居住及滿洲國ノ課稅等ニ關スル日本國滿洲國間條約ニ關シ本使ト閣下トノ間ニ左記了解成立致候

一、滿洲國政府ハ日本國臣民ノ課稅標準決定ニ付其ノ適正ヲ期スル爲當該稅務官憲ヲシテ日本人居留民團體其ノ他適當ナル者ニ課稅上參考ト爲ルベキ事項ヲ諮問セシムベシ

二、滿洲國政府ハ日本國臣民ニ對スル租稅ノ賦課徵收事務及日本國臣民ノ經營スル金融機關ニ對スル直接監督事務ハ成ルベク日本人官吏ヲシテ之ニ當ラシムベシ

本使ハ閣下ニ於テ右了解ヲ確認セラレシコトヲ希望致候

本使ハ茲ニ閣下ニ向テ敬意ヲ表シ候 敬具

昭和 年 月 日新京ニ於テ

滿洲帝國駐劄大日本帝國特命全權大使

滿洲帝國外交部大臣

閣下

(來翰)

以書翰啓上致候陳者本日附貴翰ヲ以テ左ノ如ク御申越相成敬承致候

「陳者本日署名ノ滿洲國ニ於ケル日本國臣民ノ居住及滿洲國ノ課稅等ニ關スル日本國滿洲國間條約ニ關シ本使ト閣下トノ間ニ左記了解成立致候

- 一、滿洲國政府ハ日本國臣民ノ課稅標準決定ニ付其ノ適正ヲ期スル爲當該稅務官憲ヲシテ日本人居留民團體其ノ他適當ナル者ニ課稅上參考ト爲ルベキ事項ヲ諮問セシムベシ
 - 二、滿洲國政府ハ日本國臣民ニ對スル租稅ノ賦課徵收事務及日本國臣民ノ經營スル金融機關ニ對スル直接監督事務ハ成ルベク日本人官吏ヲシテ之ニ當ラシムベシ
- 本使ハ閣下ニ於テ右了解ヲ確認セラレンコトヲ希望致候」

本大臣ハ茲ニ前記了解ヲ確認致候

本大臣ハ茲ニ閣下ニ向テ敬意ヲ表シ候 敬具

康德 年 月 日新京ニ於テ

滿洲帝國外交部大臣

滿洲帝國駐劄大日本帝國特命全權大使

閣下

内閣
内閣

滿洲國ニ於ケル日本國臣民ノ居住及滿洲國ノ
課稅等ニ關スル日本國滿洲國同條約締結ノ件

(可決後附)

滿洲國ニ於ケル帝國ノ治外法權ノ撤廢及南滿洲鐵道附
屬地行政權ノ調整乃至移讓ニ關シテハ、昨年八月九日閣議決定
ニ上裁ヲ仰ケタル次第ナルガ、爾來之ニ基キ種々研究ノ結
果、先ヅ滿洲國ニ於ケル日本國臣民ノ居住及各種權利利益ノ
享有ヲ確保スル事ニ、滿洲國ノ課稅營業等ニ關スル法令ヲ
日本國臣民ニ適用セ、且ツ附屬地ニ施行スル事ヲ承認スル事ヲ付
滿洲國ト條約ヲ締結スル事ヲ道方ト認メ、右ニ關シ案文ヲ本日閣
議決定致シタルニ付テハ、右案文ノ如キ條約ヲ締結スル事トシ、之
カ屬、駐滿大使ヲシテ滿洲國當局ト交渉セシムル事トシ、且ツ
後刻書類ヲ以テ上奏致スル事ニ付、御裁可ヲ仰テ

内閣

免考

(一〇、八、九閣議決定)

滿洲國ニ於ケル帝國ノ治外法權ノ撤廢及南滿洲
鐵道附屬地行政權ノ調整乃至移讓ニ關スル件

滿洲國ニ於ケル帝國ノ治外法權及南滿洲鐵道附屬地行政權ニ付テハ
左記方針ニ依リ關係官廳ヲシテ具體的方策ヲ攻究セシメ逐次之事實
行ヲ期スルモノトス

一、滿洲國ニ於ケル帝國ノ治外法權ニ關シテハ從來ノ條約及閣議決定
ノ精神ニ則リ滿洲國ニ於ケル制度及施設ノ整備ニ對應シ就中在留
帝國臣民ノ生活ニ急激ナル變動ヲ與ヘサルコト、滿洲國ノ全領域
ニ於ケル帝國臣民ノ安住發展ヲ一層確保スルコト及滿洲國ニ對ス
ル帝國ノ國策遂行ヲ圓滑ナラシムルコトニ付特ニ考慮シ漸進的ニ



撤廢スルモノトス

二、南滿洲鐵道附屬地其ノモノハ依然我方ニ保有スルコト勿論ナルモ當該地域ニ行使セラルル帝國ノ行政權ニ關シテハ前記治外法權撤廢トノ關聯ニ鑑ミ滿洲國ニ於ケル制度及施設ニ對應シ前項ニ於ケルト同様ノ考慮ノ下ニ治外法權ノ漸進的撤廢ト步調ヲ合セ各事項ノ性質ニ應シ調整乃至移讓スルモノトス

理由

一、帝國ノ滿洲國ニ對スル國策ノ基調トスル所ハ曩ニ昭和八年三月換發セラレタル國際聯盟脫退ニ關スル詔書竝昭和七年九月十五日調印ノ日滿議定書等ニ依リテ宣明セラレタル通滿洲國ヲシテ帝國ト不可分ノ關係ヲ持シツツ獨立國トシテ健全ナル發達ヲ爲サシムルニ在リ仍テ帝國政府ハ右根本方針ニ基キ一面日滿兩國不可分關係強化ノ爲各般ノ措置ヲ講スルト共ニ他面滿洲國ヲシテ政治經濟財政其ノ他庶政ヲ充實シテ健全ナル發達ヲ遂ケ帝國ト實質的一體ヲ爲ス東亞ノ雄邦トシテ帝國々運ノ伸長乃至東洋ノ平和ヲ確保シ大義ヲ宇内ニ顯揚セントスル帝國ノ國策ニ寄與スルニ至ラシムルコトヲ期シツツアル次第ナリ。

二、然ルニ現ニ滿洲國ニ於テ帝國カ條約上享有シ居ル治外法權ハ滿洲國成立前ノ事態ニ於テハ帝國ノ對滿發展ノ主要ナル條件ナリシモ前記我對滿國策ノ進捗ニ伴ヒ漸次其ノ重要性ヲ失フニ至レルト同時ニ、滿洲國ノ健全ナル發達ヲ遂ケシムル上ニ於テハ勿論、眞ニ日滿兩國民ノ融和ヲ圖リ滿洲國ニ於ケル我國民ノ全面的發展ヲ可能且確實ナラシメ、進ンテハ日滿兩國善隣不可分ノ關係ヲ永遠ニ強固ナラシムル上ニ於テモ、之カ撤廢ヲ必要トスルニ至レリ。依テ狀況ノ許ス限リ速ニ治外法權ノ撤廢ヲ實行スルヲ適當トス。更ニ英米等ノ諸外國ハ支那國ニ於テ有シタル權利利益ヲ滿洲國ニ於テ確認尊重スヘキコトヲ規定セル條約ナキヲ以テ、滿洲國側ニ於テハ同國ニ於テ條約上治外法權ヲ享有セサルモノト爲シ居ルモ

事實上ハ此等諸外國ヲシテ治外法權的地位ヲ保持セシメ居ル處、右ハ滿洲國ノ健全ナル發達ニ著シキ障礙ヲ及ホシ居ルコト勿論ナルヲ以テ、先ツ帝國ニ於テ治外法權ノ撤廢ヲ實行シ、以テ此等諸外國ヲシテ帝國ニ準シ其ノ事實上保持スル治外法權的地位ヲ拋棄スルニ至ラシムルコトヲ要ス。

三、尙南滿洲鐵道附屬地行政權ニ付テモ前記治外法權撤廢ノ必要ニ準シ新ナル考慮ヲ加フルノ要アルト共ニ其ノ漸次撤廢セララルニ伴ヒ必然ニ之カ調整乃至移讓ヲ圖ルノ必要ヲ加フヘシ、依テ治外法權ノ漸進的撤廢ト步調ヲ合セ十分各般ノ事情ヲ考慮シ實情ニ即應シテ附屬地行政權ノ調整乃至移讓ヲ實行スルヲ適當トス。

四、滿洲國ニ於ケル帝國ノ治外法權ノ撤廢及南滿洲鐵道附屬地行政權

ノ調整乃至移讓ニ當リテハ滿洲國ニ於ケル制度及施設ノ整備ニ對
應シ就中在留帝國臣民ノ生活ニ急激ナル變動ヲ與ヘサルコト、滿
洲國ノ全領域ニ於ケル帝國臣民ノ安全發展ヲ一層確保スルコト及
滿洲國ニ對スル帝國ノ國策遂行ヲ圓滑ナラシムルコトニ付特ニ考
慮スルノミナラス益々日滿兩國不可分關係ノ強化充實ニ努ムルハ
勿論トス。



滿洲國ニ於ケル日本國臣民ノ居住及滿洲國ノ課稅等
ニ關スル日本國滿洲國間條約締結並關係公文交換ノ件

右謹テ裁可ヲ仰ク

昭和十一年六月五日

內閣總理大臣廣田弘毅



內

閣

外第ニ九號

起案 昭和十一年六月

日 裁可 昭和十一年六月五日 施行 決定 昭和 年 月 日

昭和十一年六月六日 指令

內閣總理大臣 齋

內閣書記官長 藤田

內閣書記官

外務大臣 廣

陸軍大臣

文部大臣 子

遞信大臣

內務大臣 五

海軍大臣

農林大臣 五

鐵道大臣 也

大藏大臣 茲

司法大臣

商工大臣

拓務大臣

滿洲國ニ於ケル日本國臣民ノ居住及滿洲國ノ課稅等ニ關スル日本國滿洲國間

內閣

條約締結並關係公文交換ノ件

右樞密院ノ御諮詢ヲ經テ御下付ニ付同院上奏ノ通裁可ヲ奏請セラレ可然ト認

指令案

滿洲國ニ於ケル日本國臣民ノ居住及滿洲國ノ課稅等ニ關スル日本國滿洲國間條約締結並關係公文交換ノ件上奏ノ通裁可ヲ經タリ

臣等滿洲國ニ於ケル日本國臣民ノ居住及
滿洲國ノ課税等ニ關スル日本國滿洲國間
條約締結並關係公文交換ノ件諮詢ノ命ヲ
恪ニ本月三日ヲ以テ審議ヲ盡シ之ヲ可決
セリ乃チ謹テ上奏シ更ニ
聖明ノ採擇ヲ仰ク

昭和十一年六月三日

樞密院議長男爵_臣平沼騏一郎

秘

滿洲國ニ於ケル日本國臣民ノ居住及滿洲國ノ
課稅等ニ關スル日本國滿洲國間條約

日印令 日ノ十二百六十年十月號 第五四五二號 雜

滿洲國ニ於ケル日本國臣民ノ居住及滿洲國ノ課稅等ニ關スル日本 國滿洲國間條約

大日本帝國政府ハ昭和七年九月十五日調印ノ日本國滿洲國間議定書ノ趣旨ニ據リ滿洲國ノ健全ナル發達ヲ促進シ且日滿兩國間ニ現存スル緊密不可分ノ關係ヲ永遠ニ鞏固ナラシムル爲現ニ日本國ガ滿洲國ニ於テ有スル治外法權ヲ漸進的ニ撤廢シ且南滿洲鐵道附屬地行政權ヲ調整乃至移讓スルコトニ決シタルニ因リ

滿洲帝國政府ハ右日本國政府ノ決定ヲ多トスルト共ニ之ニ對應シテ日滿兩國臣民ノ滿洲國領域内ニ於ケル融合發展ヲ確保増進スルノ必要ナルヲ認メタルニ因リ
兩國政府ハ日本國ガ滿洲國ニ於テ有スル治外法權及南滿洲鐵道附屬地行政權ニ關シ先ヅ日本國臣民ノ居住及各種權利利益ノ享有竝ニ滿洲國ノ課稅、産業等ニ關スル法令ノ適用ニ付左ノ通協定セリ

第一條

日本國臣民ハ滿洲國ノ領域内ニ於テ自由ニ居住往來シ農業、商工業其ノ他公私各種ノ業務及職務

ニ從事スルコトヲ得ベク且土地ニ關スル一切ノ權利ヲ享有スベシ
日本國臣民ハ滿洲國ノ領域内ニ於テ一切ノ權利ノ享有及利益ノ享受ニ關シ滿洲國臣民ニ比シ不利
益ナル待遇ヲ受クルコトナカルベシ

第二條

日本國臣民ハ滿洲國ノ領域内ニ於テ本條約附屬協定ノ定ムル所ニ從ヒ同國ノ課税、産業等ニ關ス
ル行政法令ニ服スベシ
南滿洲鐵道附屬地ニ在リテハ日本國政府ハ前項ノ滿洲國法令ガ本條約附屬協定ノ定ムル所ニ從ヒ
屬地的ニ施行セララルコトヲ承認ス
本條ノ適用ニ關シ日本國臣民ハ如何ナル場合ニ於テモ滿洲國臣民ニ比シ不利益ナル待遇ヲ受クル
コトナカルベシ

第三條

前二條ノ規定ハ之ヲ法人ニ適用シ得ル限リ日本國法人ニ適用スルモノトス

第四條

本條約ノ規定ハ日滿兩國間ノ特別ノ約定ニ基ク特定ノ日本國ノ臣民又ハ法人ノ權利、特權、特典

及免除ニ影響ヲ及ボザザルモノトス

第五條

本條約ハ昭和十一年七月一日即チ康德三年七月一日ヨリ實施セララルベシ

第六條

本條約ノ正文ハ日本文及漢文トシ日本文本文ト漢文本文トノ間ニ解釋ヲ異ニスルトキハ日本文本
文ニ依リ之ヲ決ス

右證據トシテ下名ハ各本國政府ヨリ正當ノ委任ヲ受ケ本條約ニ署名調印セリ

昭和 年 月 日即チ康德 年 月 日新京ニ於テ本書ニ通テ作成ス

滿洲帝國駐劄大日本帝國特命全權大使
滿洲帝國外交部大臣

附屬協定

本日滿洲國ニ於ケル日本國臣民ノ居住及滿洲國ノ課稅等ニ關スル日本國滿洲國間條約ニ署名スルニ當リ兩國全權委員ハ左ノ通協定セリ

第一條

滿洲國政府ハ從來日本國臣民ノ有スル商租權ヲ其ノ内容ニ應ジ土地所有權其ノ他ノ土地ニ關スル權利ニ變更スル爲速ニ必要ノ措置ヲ執ルベシ

第二條

條約第二條ノ規定ニ依リ日本國臣民ノ服スベキ滿洲國ノ課稅、産業等ニ關スル行政法令ノ範圍及其ノ適用ノ態様ハ豫メ滿洲帝國駐劄大日本帝國特命全權大使ト滿洲帝國外交部大臣トノ間ニ協議決定セラレベシ

前項ノ規定ニ依リ日本國臣民ノ服スベキ滿洲國法令ニ付滿洲國政府ニ於テ重要ナル變更ヲ加ヘントスルトキハ日本國臣民ガ滿洲國ノ裁判管轄權ニ服スルニ至ル迄豫メ滿洲帝國駐劄大日本帝國特命全權大使ノ承認ヲ經ベシ

本條第一項ノ規定ニ依リ條約實施後直ニ協議決定セラルベキ滿洲國法令ハ概ネ地稅、契稅、營業稅、法人營業稅、出產糧石稅、木稅、鑛業稅、鑛業登錄稅、酒稅、捲菸稅、統稅、商業登記稅、特許登錄稅、意匠登錄稅及地方稅ニ關スル課稅法令竝ニ工業所有權、度量衡、計量、鑛業、市場、畜產、金融及專賣ニ關スル行政法令ニ限ラルベシ

滿洲國政府ハ前項ニ掲グル諸稅中營業稅及法人營業稅竝ニ地方稅中房捐及戶別捐ヲ日本國臣民ニ課スルニ當リテハ條約實施後當分ノ內豫メ滿洲帝國駐劄大日本帝國特命全權大使ト滿洲帝國外交部大臣トノ間ニ協議決定セラルル所ニ從ヒ輕減稅率ヲ適用スベク地方稅中營業稅附加捐ハ右輕減稅率ニ依ル稅額ヲ基準トスベシ但シ條約實施後直ニ適用スベキ輕減稅率ハ營業稅、戶別捐及個人ニ賦課スル房捐ニ付テハ原稅率ノ四分ノ一タルベク法人營業稅及法人ニ賦課スル房捐ニ付テハ原稅率ノ三分ノ一タルベシ

第三條

條約第二條ノ規定ニ依リ日本國臣民ノ服スベキ滿洲國法令ノ日本國臣民ニ對スル適用及執行ニシテ司法手續ニ依ルベキモノハ日本國臣民ガ滿洲國ノ裁判管轄權ニ服スルニ至ル迄日本國領事官ニ於テ之ヲ行フモノトス

前項ノ場合ニ於テハ日本國領事官ハ領事裁判ノ一般準則ニ從ヒ滿洲國當該法令ヲ適用スベシ但シ右法令ニ掲グル刑ノ中有期徒刑トアルハ懲役又ハ禁錮、拘役トアルハ懲役若ハ禁錮又ハ拘留、罰金トアルハ罰金又ハ科料、過怠金トアルハ過料ト看做シテ之ヲ適用スベシ
本條ノ規定ニ依リ罰金、科料、過料又ハ沒收ノ言渡アリタル場合ニ於テ其ノ罰金、科料、過料又ハ沒收物ハ滿洲國政府ニ歸屬スベシ

第四條

日本國政府ハ別ニ滿洲國政府ト協定スル所ニ從ヒ遲クトモ昭和十二年十二月三十一日即チ康德四年十二月三十一日迄ニ滿洲國領域内ニ於ケル行政警察ヲ撤廢又ハ移讓スベク右撤廢又ハ移讓ニ至ル迄ハ條約第二條ノ滿洲國法令中課稅ニ關スルモノ及特ニ南滿洲鐵道附屬地ニ於ケル行政警察ト關係アルモノハ同附屬地ニ施行セラレザルベシ右ノ特ニ南滿洲鐵道附屬地ニ於ケル行政警察ト關係アル法令ノ範圍ハ豫メ滿洲帝國駐劄大日本帝國特命全權大使ト滿洲帝國外交部大臣トノ間ニ協議決定セラルベシ

滿洲國政府ハ前項ノ規定ニ鑑ミ其ノ警察制度ヲ整備スベク且關係日本側ノ施設及職員ノ引繼ニ付必要ナル準備ヲ爲スベシ

日本國政府ハ南滿洲鐵道附屬地ニ於ケル行政警察ノ移讓ニ至ル迄同附屬地内外ニ於ケル日本國臣民ノ課税上ノ負擔均衡ヲ確保スル爲條約實施ノ日ヨリ滿洲國ガ日本國臣民ニ課スル國税ト成ルベク同様ノ課税ヲ同附屬地ニ於テ實施スベシ
滿洲國政府ハ日滿兩國政府ガ別ニ協定スル所ニ從ヒ南滿洲鐵道附屬地ニ於ケル南滿洲鐵道株式會社ノ土木、教育、衛生等ニ關スル施設ノ處理ヲ經タル後ニ非ザレバ同附屬地ニ於テ地方税ヲ課セザルベシ

第五條

條約第二條ノ規定ニ依リ滿洲國法令ガ南滿洲鐵道附屬地ニ施行セラルルト同時ニ滿洲國政府ハ豫メ滿洲帝國駐劄大日本帝國特命全權大使ト滿洲帝國外交部大臣トノ間ニ協議決定セラルル所ニ從ヒ關係日本側ノ施設及職員ヲ右施行當時ノ狀態ニ於テ引繼グベシ

第六條

條約第二條ノ規定ニ依リ日本國臣民ノ服スベキ滿洲國法令ニ關スル滿洲國當該官憲ノ行政處分ニ對シ日本國臣民ニ於テ不服アルトキハ滿洲國政府ハ之ガ救正ニ付適當ナル措置ヲ講ズベシ

第七條

本協定ノ條項ニ從ヒ滿洲帝國駐劄大日本帝國特命全權大使ト滿洲帝國外交部大臣トノ間ニ協議決定セラレタル事項及滿洲國政府ガ同大使ノ承認ヲ經タル事項ハ夫々日滿兩國ノ官報ニ公示セラレベシ

第八條

本協定ハ條約ト同時ニ實施セラルベシ

右證據トシテ兩國全權委員ハ本協定ニ署名調印セリ

昭和 年 月 日即チ康德 年 月 日新京ニ於テ之ヲ作成ス

滿洲帝國駐劄大日本帝國特命全權大使
滿洲帝國外交部大臣

滿洲國ニ於ケル日本國臣民ノ居住及滿洲國ノ課稅等ニ關スル日本
國滿洲國間條約及附屬協定ニ關スル日滿兩國全權委員間了解事項

第一 條約第一條ニ付

未開放蒙地ニ於テ日本國臣民ガ土地ニ關スル權利ヲ取得スル場合ニハ滿洲國當該官憲ノ許可ヲ
要スルモノトス

第二 條約第二條ニ付

一 滿洲國政府ハ滿洲國領域内ニ於テ現ニ日本人居留民團體ガ日本國臣民ノ教育事業ヲ經營シ
居ルノ事情ニ鑑ミ滿洲帝國駐劄大日本帝國特命全權大使ト滿洲帝國外交部大臣トノ間ニ協議
決定セララルル所ニ從ヒ日本國臣民ノ教育事業ニ要スル費用ヲ毎年分擔スベシ

二 滿洲國政府ハ現行租稅制度ヲ更ニ整備スベシ

三 滿洲國政府ハ條約第二條ノ規定ニ依リ日本國臣民ノ服スベキ滿洲國法令ノ適用ニ當リ日本
國臣民ガ日本國法令又ハ慣行ニ依リ現ニ享受スル權利又ハ利益ノ保護ニ付必要ナル措置ヲ講
ズベシ

第三 附屬協定第四條ニ付

南滿洲鐵道附屬地内ニ於テ生産セラレ同附屬地外ニ於テ消費セラルル物品及同附屬地外ニ於テ
生産セラレ同附屬地内ニ於テ消費セラルル物品ニ對スル消費税ノ賦課徵收ニ關シテハ日滿兩國
當該官憲間ニ於テ協議決定スベシ

昭和 年 月 日即チ康德 年 月 日新京ニ於テ



關於在滿洲國日本國臣民居住及滿洲國
課稅等之滿洲國與日本國間條約

(昭和十一年四月二十二日 印刷)

關於在滿洲國日本國臣民居住及滿洲國課稅等之滿洲國與日本國間
條約

茲因大日本帝國政府決定爲依據昭和七年九月十五日蓋印之滿洲國日本國間議定書之主旨促進滿洲國健全發達且使滿日兩國間現存緊密不可分之關係永遠鞏固起見將現在日本國在滿洲國所有之治外法權逐漸撤廢且將南滿洲鐵道附屬地行政權調整乃至移讓

又因滿洲帝國政府以上開日本國政府之決定多之而同時認爲對應於此將滿日兩國臣民在滿洲國領域內融合發展確保增進之必要

兩國政府關於日本國在滿洲國所有之治外法權及南滿洲鐵道附屬地行政權先對於日本國臣民居住及各種權利利益之享有並關於滿洲國課稅產業等之法令之適用協定如左

第一條

日本國臣民應得在滿洲國領域內任便居住往來並從事農業工商業其他公私各種生意及職務且享有關於土地之一切權利

日本國臣民應關於在滿洲國領域內所有權利之享有及利益之享受不受較次於滿洲國臣民之待遇

第二條

日本國臣民應在滿洲國領域內遵照本條約附屬協定所定服從關於該國課稅產業等之行政法令
在南滿洲鐵道附屬地則日本國政府承認前項滿洲國法令遵照本條約附屬協定所定屬地的施行
關於本條之適用日本國臣民應無論在何種情形之下不受較次於滿洲國臣民之待遇

二

第三條

前二條規定對於法人應得適用之處適用於日本國法人

第四條

本條約規定不得影響于基於滿日兩國間特別約定之特定日本國臣民或其法人一切權利特權優例及豁免

第五條

本條約自康德三年七月一日即昭和十一年七月一日起實施之

第六條

本條約以漢文及日本文為正文漢文原文與日本文原文間遇有解釋不同之處應以日本文原文為準

為此記名各員各奉本國政府之正當委任將本條約署名蓋印以昭信守

康德 年月 日
昭和 年月 日
於新京繕成本書兩份

滿洲帝國 外交部 大臣
滿洲帝國駐劄大日本帝國特命全權大使

附屬協定

當本日署名關於在滿洲國日本國臣民居住及滿洲國課稅等之滿洲國與日本國間條約兩國全權委員協定如左

第一條

滿洲國政府為將日本國臣民向有之商租權按照其內容變更為土地所有權其他關於土地之權利起見應速執必要措置

第二條

依照條約第二條規定日本國臣民應服從之關於滿洲國課稅產業等之行政法令範圍及其適用態樣應由滿洲帝國外交部大臣與滿洲帝國駐劄大日本帝國特命全權大使之間預先協議決定
依照前項規定日本國臣民應服從之滿洲國法令由滿洲國政府擬加重要變更時迄至日本國臣民服從滿洲國裁判管轄權間應預先經滿洲帝國駐劄大日本帝國特命全權大使承認

依照本條第一項規定條約實施後應即協議決定之滿洲國法令概以關於地稅契稅營業稅法人營業稅出產糧石稅木稅鑛業稅鑛業登錄稅酒稅捲菸稅統稅商業登記稅特許登錄稅意匠登錄稅及地方稅之課稅

法令並關於工業所有權度量衡計量鑛業市場畜產金融及專賣之行政法令爲限

六

滿洲國政府當將前項所載各稅之中營業稅及法人營業稅並地方稅之中房租及戶別捐課於日本國臣民條約實施後暫時遵照由滿洲帝國外交部大臣與滿洲帝國駐劄大日本帝國特命全權大使之間所預先協議決定應適用輕減稅率而地方稅之中營業稅附加捐應以依上開輕減稅率之稅額爲基準但條約實施後應即適用之輕減稅率關於營業稅戶別捐及賦課於個人之房租者應爲原稅率之四分之一而關於法人營業稅及賦課於法人之房租者應爲原稅率之三分之一

第三條

依照條約第二條規定日本國臣民應服從之滿洲國法令對於日本國臣民之適用及執行須經司法程序者迄至日本國臣民服從滿洲國裁判管轄權間由日本國領事官行之

於前項情形日本國領事官應遵照領事裁判之一般準則適用滿洲國該項法令但上開法令所裁判之中稱有期徒刑者視爲懲役或禁錮稱拘留者懲役或禁錮或拘留稱罰金者罰金或科料稱過怠金者過料而適用之

依照本條規定有論知罰金科料過料或沒收者其罰金科料過料或沒收物均歸滿洲國政府

第四條

日本國政府應遵照另與滿洲國政府所協定至遲康德四年十二月三十一日即昭和十二年十二月三十一日以前將在滿洲國領域內行政警察撤廢或移讓而迄至該撤廢或移讓間條約第二條所載滿洲國法令之中關於課稅者及特與在南滿洲鐵道附屬地行政警察有關係者均應不施行於該附屬地上開特與在南滿洲鐵道附屬地行政警察有關係法令之範圍應由滿洲帝國外交部大臣與滿洲帝國駐劄大日本帝國特命全權大使之間預先協議決定

滿洲國政府應鑒於前項規定整備其警察制度且關於接收關係日本方面施設及其職員作爲必要準備日本國政府迄至移讓在南滿洲鐵道附屬地行政警察間爲確保在該附屬地內外日本國臣民課稅上負擔均衡起見應自條約實施之日起在該附屬地實施務與滿洲國課於日本國臣民之國稅相同之課稅滿洲國政府非經遵照滿日兩國政府另所協定處理在南滿洲鐵道附屬地南滿洲鐵道株式會社關於土木教育衛生等之施設後應在該附屬地不課地方稅

第五條

依照條約第二條規定滿洲國法令施行於南滿洲鐵道附屬地與其同時滿洲國政府應遵照由滿洲帝國外交部大臣與滿洲帝國駐劄大日本帝國特命全權大使之間所預先協議決定於該施行當時之狀態接收關係日本方面施設及其職員

第六條

對於關於依照條約第二條規定日本國臣民應服從之滿洲國法令之滿洲國該管官憲行政處分日本國臣民遇有不服者滿洲國政府應關於其救正講適當措置

第七條

遵照本協定條款由滿洲帝國外交部大臣與滿洲帝國駐劄大日本帝國特命全權大使之間經協議決定之事項及由滿洲國政府經該大使承認之事項應各在滿日兩國政府公報佈告之

第八條

本協定當與條約同時實施之

爲此兩國全權委員將本協定署名蓋印以昭信守

康德 年月 日

昭和 年月 日

訂於新京

滿洲帝國 外交部 大臣

滿洲帝國駐劄大日本帝國特命全權大使

關於關於在滿洲國日本國臣民居住及滿洲國課稅等之滿洲國與日本國間條約及附屬協定滿日兩國全權委員間了解事項

第一 係附條約第一條

在未開放蒙地日本國臣民取得關於土地之權利者必須呈經滿洲國該管官憲核准

第二 係附條約第二條

一 滿洲國政府鑒於在滿洲國領域內日本人居留民團體現在經營日本國臣民教育事業之實情應遵照由滿洲帝國外交部大臣與滿洲帝國駐劄大日本帝國特命全權大使之間所協議決定每年分擔日本國臣民教育事業所要之經費

二 滿洲國政府應更加整備現行租稅制度

三 滿洲國政府當適用依照條約第二條規定日本國臣民應服從之滿洲國法令應關於保護日本國臣民依日本國之法令或慣行現在享受之權利或利益講必要措置

第三 係附屬協定第四條

關於對於在南滿洲鐵道附屬地內出產而在該附屬地外消費之物品及在該附屬地外出產而在該附屬

地內消費之物品消費稅之賦課徵收者應由滿日兩國該管官憲間協議決定

康德 年 月 日
昭和 年 月 日
於新京

極秘

交換公文案

本公文ハ條約實施後モ之ヲ公表セズ

(昭和十一年四月二十二日 印刷)

(往翰)

以書翰啓上致候陳者本日署名ノ滿洲國ニ於ケル日本國臣民ノ居住及滿洲國ノ課稅等ニ關スル日本國滿洲國間條約ニ關シ本使ト閣下トノ間ニ左記了解成立致候

- 一 滿洲國政府ハ日本國臣民ノ課稅標準決定ニ付其ノ適正ヲ期スル爲當該稅務官憲ヲシテ日本人居留團體其ノ他適當ナル者ニ課稅上參考ト爲ルベキ事項ヲ諮問セシムベシ
 - 二 滿洲國政府ハ日本國臣民ニ對スル租稅ノ賦課徵收事務及日本國臣民ノ經營スル金融機關ニ對スル直接監督事務ハ成ルベク日本人官吏ヲシテ之ニ當ラシムベシ
- 本使ハ閣下ニ於テ右了解ヲ確認セラレンコトヲ希望致候
本使ハ茲ニ閣下ニ向テ敬意ヲ表シ候 敬具

昭和 年 月 日新京ニ於テ

滿洲帝國駐劄大日本帝國特命全權大使

滿洲帝國外交部大臣 閣下

滿洲國政府關於決定對於日本國臣民之課稅標準為期其適正起見應使該管稅務官憲向日本人
居留團體其他適當之者諮問課稅上可供參考之事項
二 滿洲國政府應將對於日本國臣民之租稅之賦課徵收事務及對於日本國臣民所經營金融機關之
直接監督事務使日本人官吏辦理
本大使希望閣下對於上開了解予以確認
本大臣對於前述了解予以確認相應照復
貴大使查照可也須至照會者
右 照 會

(來翰)

滿洲帝國外交部大臣

照復事接准

貴大使本日照會內有左開事項業經閱悉

關於本日署名之關於在滿洲國日本國臣民居住及滿洲國課稅等之滿洲國與日本國間條約本使與
閣下之間成立下開了解

一 滿洲國政府關於決定對於日本國臣民之課稅標準為期其適正起見應使該管稅務官憲向日本人
居留團體其他適當之者諮問課稅上可供參考之事項

二 滿洲國政府應將對於日本國臣民之租稅之賦課徵收事務及對於日本國臣民所經營金融機關之
直接監督事務使日本人官吏辦理

本大使希望閣下對於上開了解予以確認
本大臣對於前述了解予以確認相應照復
貴大使查照可也須至照會者

右 照 會

為

滿洲帝國駐劄大日本帝國特命全權大使
康德 年 月 日於新京

四

(來翰譯文)

以書翰啓上致候陳者本日附貴翰ヲ以テ左ノ如ク御申越相成敬承致候

「陳者本日署名ノ滿洲國ニ於ケル日本國臣民ノ居住及滿洲國ノ課稅等ニ關スル日本國滿洲國間條約ニ關シ本使ト閣下トノ間ニ左記了解成立致候

一 滿洲國政府ハ日本國臣民ノ課稅標準決定ニ付其ノ適正ヲ期スル爲當該稅務官憲ヲシテ日本人居留民團體其ノ他適當ナル者ニ課稅上參考ト爲ルベキ事項ヲ諮問セシムベシ

二 滿洲國政府ハ日本國臣民ニ對スル租稅ノ賦課徵收事務及日本國臣民ノ經營スル金融機關ニ對スル直接監督事務ハ成ルベク日本人官吏ヲシテ之ニ當ラシムベシ

本使ハ閣下ニ於テ右了解ヲ確認セラレシコトヲ希望致候」

本大臣ハ茲ニ前記了解ヲ確認致候

本大臣ハ茲ニ閣下ニ向テ敬意ヲ表シ候 敬具

康德 年 月 日新京ニ於テ

滿洲帝國外交部大臣

滿洲帝國駐劄大日本帝國特命全權大使

閣下

五

外甲 二九 御覽濟内閣へ御下付

昭和十一年四月
二十四日御下付

佐野

昭和十一年四月二十三日

内閣書記官長

内閣書記官

川島

橋

内閣總理大臣 齋

法制局長官



外務大臣

廣

陸軍大臣

文部大臣

子

逓信大臣

厚

内務大臣

五

海軍大臣

農林大臣

五

鐵道大臣

也

大藏大臣

五

司法大臣

商工大臣

五

拓務大臣

查

別紙外務大臣請議滿洲國ニ於ケル日本國臣民ノ居住
及滿洲國ノ課稅等ニ關スル日本國滿洲國間條約
締結ノ件ヲ審查スルニ右ハ相當ノ儀ト思考ス

法制局

依テ請議ノ通閣議決定裁可ヲ奏請セラレ可然
ト認ム

追テ本件ハ列國交渉ノ條約及約束ナルヲ
以テ樞密院ニ御諮詢相成可然ト認ム

法制局外 八号 四月廿五日

條一機密第二四二號

昭和十一年四月二十二日

外務大臣 有田 八郎



内閣總理大臣 廣田 弘毅 殿

滿洲國ニ於ケル日本國臣民ノ居住及滿洲國ノ課稅等ニ
關スル日本國滿洲國間條約締結ノ件

標記條約締結ノ爲在滿帝國全權大使ヲシテ滿洲國當局ト交渉セシム
ルノ件ニ付テハ四月十七日閣議決定ノ次第アリタル處右ニ基キ在滿
植田大使ヲシテ交渉セシメタル結果今般「滿洲國ニ於ケル日本國臣
民ノ居住及滿洲國ノ課稅等ニ關スル日本國滿洲國間條約」案及關係
交換公文案ニ付別添ノ通安結ヲ見ルニ至レリ
仍テ在滿帝國全權大使ヲシテ右條約ニ署名セシムルト共ニ滿洲國外

外甲二九

外務省

交部大臣トノ間ニ前記公文ヲ交換セシムルト致度ニ付右御裁可
方至急御取計相成度別紙上奏案相添へ此段及請議候也
追テ條約案日本文及漢文各五部竝ニ交換公文案五部添付致置候

は(イ)

外務省

滿洲國ニ於ケル日本國臣民ノ居住及滿洲國ノ課稅等ニ關スル日本國
滿洲國間條約締結及關係公文交換ノ件御裁可アラセラレ候様仕度此
段謹デ奏ス

昭和十一年四月二十二日

外務大臣 有田 八郎



外務省

滿洲國ニ於ケル日本國臣民ノ居住及滿洲國ノ
課稅等ニ關スル日本國滿洲國間條約

滿洲國ニ於ケル日本國臣民ノ居住及滿洲國ノ課稅等ニ關スル日本
國滿洲國間條約

大日本帝國政府ハ昭和七年九月十五日調印ノ日本國滿洲國間議定書ノ趣旨ニ據リ滿洲國ノ健全ナ
ル發達ヲ促進シ且日滿兩國間ニ現存スル緊密不可分ノ關係ヲ永遠ニ鞏固ナラシムル爲現ニ日本國
ガ滿洲國ニ於テ有スル治外法權ヲ漸進的ニ撤廢シ且南滿洲鐵道附屬地行政權ヲ調整乃至移讓スル
コトニ決シタルニ因リ

滿洲帝國政府ハ右日本國政府ノ決定ヲ多トスルト共ニ之ニ對應シテ日滿兩國臣民ノ滿洲國領域内
ニ於ケル融合發展ヲ確保増進スルノ必要ナルヲ認メタルニ因リ
兩國政府ハ日本國ガ滿洲國ニ於テ有スル治外法權及南滿洲鐵道附屬地行政權ニ關シ先ツ日本國臣
民ノ居住及各種權利利益ノ享有竝ニ滿洲國ノ課稅、產業等ニ關スル法令ノ適用ニ付左ノ通協定セ
リ

第一條

日本國臣民ハ滿洲國ノ領域内ニ於テ自由ニ居住往來シ農業、商工業其ノ他公私各種ノ業務及職務

ニ從事スルコトヲ得ベク且土地ニ關スル一切ノ權利ヲ享有スベシ
日本國臣民ハ滿洲國ノ領域内ニ於テ一切ノ權利ノ享有及利益ノ享受ニ關シ滿洲國臣民ニ比シ不利
益ナル待遇ヲ受クルコトナカルベシ

第二條

日本國臣民ハ滿洲國ノ領域内ニ於テ本條約附屬協定ノ定ムル所ニ從ヒ同國ノ課税、産業等ニ關ス
ル行政法令ニ服スベシ
南滿洲鐵道附屬地ニ在リテハ日本國政府ハ前項ノ滿洲國法令ガ本條約附屬協定ノ定ムル所ニ從ヒ
屬地的ニ施行セラルルコトヲ承認ス
本條ノ適用ニ關シ日本國臣民ハ如何ナル場合ニ於テモ滿洲國臣民ニ比シ不利益ナル待遇ヲ受クル
コトナカルベシ

第三條

前二條ノ規定ハ之ヲ法人ニ適用シ得ル限リ日本國法人ニ適用スルモノトス

第四條

本條約ノ規定ハ日滿兩國間ノ特別ノ約定ニ基ク特定ノ日本國ノ臣民又ハ法人ノ權利、特權、特典

及免除ニ影響ヲ及ボサザルモノトス

第五條

本條約ハ昭和十一年七月一日即チ康德三年七月一日ヨリ實施セラルベシ

第六條

本條約ノ正文ハ日本文及漢文トシ日本文本文ト漢文本文トノ間ニ解釋ヲ異ニスルトキハ日本文本
文ニ依リ之ヲ決ス

右證據トシテ下名ハ各本國政府ヨリ正當ノ委任ヲ受ケ本條約ニ署名調印セリ

昭和 年 月 日即チ康德 年 月 日新京ニ於テ本書ニ通テ作成ス

滿洲帝國駐劄大日本帝國特命全權大使
滿洲帝國外交部大臣

附屬協定

本日滿洲國ニ於ケル日本國臣民ノ居住及滿洲國ノ課稅等ニ關スル日本國滿洲國間條約ニ署名スルニ當リ兩國全權委員ハ左ノ通協定セリ

第一條

滿洲國政府ハ從來日本國臣民ノ有スル商租權ヲ其ノ内容ニ應ジ土地所有權其ノ他ノ土地ニ關スル權利ニ變更スル爲速ニ必要ノ措置ヲ執ルベシ

第二條

條約第二條ノ規定ニ依リ日本國臣民ノ服スベキ滿洲國ノ課稅、產業等ニ關スル行政法令ノ範圍及其ノ適用ノ態様ハ豫メ滿洲帝國駐劄大日本帝國特命全權大使ト滿洲帝國外交部大臣トノ間ニ協議決定セララルベシ

前項ノ規定ニ依リ日本國臣民ノ服スベキ滿洲國法令ニ付滿洲國政府ニ於テ重要ナル變更ヲ加ヘントスルトキハ日本國臣民ガ滿洲國ノ裁判管轄權ニ服スルニ至ル迄豫メ滿洲帝國駐劄大日本帝國特命全權大使ノ承認ヲ經ベシ

本條第一項ノ規定ニ依リ條約實施後直ニ協議決定セラルベキ滿洲國法令ハ概テ地稅、契稅、營業稅、法人營業稅、出產糧石稅、木稅、鑛業稅、鑛業登錄稅、酒稅、捲菸稅、統稅、商業登記稅、特許登錄稅、意匠登錄稅及地方稅ニ關スル課稅法令竝ニ工業所有權、度量衡、計量、鑛業、市場、畜產、金融及專賣ニ關スル行政法令ニ限ラルベシ

滿洲國政府ハ前項ニ掲グル諸稅中營業稅及法人營業稅竝ニ地方稅中房捐及戶別捐ヲ日本國臣民ニ課スルニ當リテハ條約實施後當分ノ內豫メ滿洲帝國駐劄大日本帝國特命全權大使ト滿洲帝國外交部大臣トノ間ニ協議決定セラルル所ニ從ヒ輕減稅率ヲ適用スベク地方稅中營業稅附加捐ハ右輕減稅率ニ依ル稅額ヲ基準トスベシ但シ條約實施後直ニ適用スベキ輕減稅率ハ營業稅、戶別捐及個人ニ賦課スル房捐ニ付テハ原稅率ノ四分ノ一タルベク法人營業稅及法人ニ賦課スル房捐ニ付テハ原稅率ノ三分ノ一タルベシ

第三條

條約第二條ノ規定ニ依リ日本國臣民ノ服スベキ滿洲國法令ノ日本國臣民ニ對スル適用及執行ニシテ司法手續ニ依ルベキモノハ日本國臣民ガ滿洲國ノ裁判管轄權ニ服スルニ至ル迄日本國領事官ニ於テ之ヲ行フモノトス

前項ノ場合ニ於テハ日本國領事官ハ領事裁判ノ一般準則ニ從ヒ滿洲國當該法令ヲ適用スベシ但シ右法令ニ掲グル刑ノ中有期徒刑トアルハ懲役又ハ禁錮、拘役トアルハ懲役若ハ禁錮又ハ拘留、罰金トアルハ罰金又ハ科料、過怠金トアルハ過料ト看做シテ之ヲ適用スベシ
本條ノ規定ニ依リ罰金、科料、過料又ハ沒收ノ言渡アリタル場合ニ於テ其ノ罰金、科料、過料又ハ沒收物ハ滿洲國政府ニ歸屬スベシ

第四條

日本國政府ハ別ニ滿洲國政府ト協定スル所ニ從ヒ遲クトモ昭和十二年十二月三十一日即チ康德四年十二月三十一日迄ニ滿洲國領域内ニ於ケル行政警察ヲ撤廢又ハ移讓スベク右撤廢又ハ移讓ニ至ル迄ハ條約第二條ノ滿洲國法令中課稅ニ關スルモノ及特ニ南滿洲鐵道附屬地ニ於ケル行政警察ト關係アルモノハ同附屬地ニ施行セラレザルベシ右ノ特ニ南滿洲鐵道附屬地ニ於ケル行政警察ト關係アル法令ノ範圍ハ豫メ滿洲帝國駐劄大日本帝國特命全權大使ト滿洲帝國外交部大臣トノ間ニ協議決定セラレベシ

滿洲國政府ハ前項ノ規定ニ鑑ミ其ノ警察制度ヲ整備スベク且關係日本側ノ施設及職員ノ引繼ニ付必要ナル準備ヲ爲スベシ

日本國政府ハ南滿洲鐵道附屬地ニ於ケル行政警察ノ移讓ニ至ル迄同附屬地内外ニ於ケル日本國臣民ノ課稅上ノ負擔均衡ヲ確保スル爲條約實施ノ日ヨリ滿洲國ガ日本國臣民ニ課スル國稅ト成ルベク同様ノ課稅ヲ同附屬地ニ於テ實施スベシ

滿洲國政府ハ日滿兩國政府ガ別ニ協定スル所ニ從ヒ南滿洲鐵道附屬地ニ於ケル南滿洲鐵道株式會社ノ土木、教育、衛生等ニ關スル施設ノ處理ヲ經タル後ニ非ザレバ同附屬地ニ於テ地方稅ヲ課セザルベシ

第五條

條約第二條ノ規定ニ依リ滿洲國法令ガ南滿洲鐵道附屬地ニ施行セラルト同時ニ滿洲國政府ハ豫メ滿洲帝國駐劄大日本帝國特命全權大使ト滿洲帝國外交部大臣トノ間ニ協議決定セラルル所ニ從ヒ關係日本側ノ施設及職員ヲ右施行當時ノ狀態ニ於テ引繼グベシ

第六條

條約第二條ノ規定ニ依リ日本國臣民ノ服スベキ滿洲國法令ニ關スル滿洲國當該官憲ノ行政處分ニ對シ日本國臣民ニ於テ不服アルトキハ滿洲國政府ハ之ガ救正ニ付適當ナル措置ヲ講ズベシ

第七條

本協定ノ條項ニ從ヒ滿洲帝國駐劄大日本帝國特命全權大使ト滿洲帝國外交部大臣トノ間ニ協議決定セラレタル事項及滿洲國政府ガ同大使ノ承認ヲ經タル事項ハ夫々日滿兩國ノ官報ニ公示セラルベシ

第八條

本協定ハ條約ト同時ニ實施セラルベシ

右證據トシテ兩國全權委員ハ本協定ニ署名調印セリ

昭和 年 月 日即チ康德 年 月 日新京ニ於テ之ヲ作成ス

滿洲帝國駐劄大日本帝國特命全權大使
滿洲帝國外交部大臣

滿洲國ニ於ケル日本國臣民ノ居住及滿洲國ノ課稅等ニ關スル日本
國滿洲國間條約及附屬協定ニ關スル日滿兩國全權委員間了解事項

第一 條約第一條ニ付

未開放蒙地ニ於テ日本國臣民ガ土地ニ關スル權利ヲ取得スル場合ニハ滿洲國當該官憲ノ許可ヲ
要スルモノトス

第二 條約第二條ニ付

- 一 滿洲國政府ハ滿洲國領域内ニ於テ現ニ日本人居留民團體ガ日本國臣民ノ教育事業ヲ經營シ
居ルノ事情ニ鑑ミ滿洲帝國駐劄大日本帝國特命全權大使ト滿洲帝國外交部大臣トノ間ニ協議
決定セララルル所ニ從ヒ日本國臣民ノ教育事業ニ要スル費用ヲ毎年分擔スベシ
- 二 滿洲國政府ハ現行租稅制度ヲ更ニ整備スベシ
- 三 滿洲國政府ハ條約第二條ノ規定ニ依リ日本國臣民ノ服スベキ滿洲國法令ノ適用ニ當リ日本
國臣民ガ日本國法令又ハ慣行ニ依リ現ニ享受スル權利又ハ利益ノ保護ニ付必要ナル措置ヲ講
ズベシ

第三 附屬協定第四條ニ付
南滿洲鐵道附屬地内ニ於テ生産セラレ同附屬地外ニ於テ消費セラルル物品及同附屬地外ニ於テ
生産セラレ同附屬地内ニ於テ消費セラルル物品ニ對スル消費税ノ賦課徴收ニ關シテハ日滿兩國
當該官憲間ニ於テ協議決定スベシ

昭和 年 月 日即チ康德 年 月 日新京ニ於テ

關於在滿洲國日本國臣民居住及滿洲國
課稅等之滿洲國與日本國間條約

(昭和十一年四月二十二日 印刷)

關於在滿洲國日本國臣民居住及滿洲國課稅等之滿洲國與日本國間
條約

茲因大日本帝國政府決定為依據昭和七年九月十五日蓋印之滿洲國日本國間議定書之主旨促進滿洲國健全發達且使滿日兩國間現存緊密不可分之關係永遠鞏固起見將現在日本國在滿洲國所有之治外法權逐漸撤廢且將南滿洲鐵道附屬地行政權調整乃至移讓

又因滿洲帝國政府以上開日本國政府之決定多之而同時認為對應於此將滿日兩國臣民在滿洲國領域內融合發展確保增進之必要

兩國政府關於日本國在滿洲國所有之治外法權及南滿洲鐵道附屬地行政權先對於日本國臣民居住及各種權利利益之享有並關於滿洲國課稅產業等之法令之適用協定如左

第一條

日本國臣民應得在滿洲國領域內任便居住往來並從事農業工商業其他公私各種生意及職務且享有關於土地之一切權利

日本國臣民應關於在滿洲國領域內所有權利之享有及利益之享受不受較次於滿洲國臣民之待遇

第二條

日本國臣民應在滿洲國領域內遵照本條約附屬協定所定服從關於該國課稅產業等之行政法令
在南滿洲鐵道附屬地則日本政府承認前項滿洲國法令遵照本條約附屬協定所定屬地的施行
關於本條之適用日本國臣民應無論在何種情形之下不受較次於滿洲國臣民之待遇

二

第三條

前二條規定對於法人應得適用之處適用於日本國法人

第四條

本條約規定不得影響于基於滿日兩國間特別約定之特定日本國臣民或其法人一切權利特權優例及豁免

第五條

本條約自康德三年七月一日即昭和十一年七月一日起實施之

第六條

本條約以漢文及日本文為正文漢文原文與日本文原文間遇有解釋不同之處應以日本文原文為準

為此記名各員各奉本國政府之正當委任將本條約署名蓋印以昭信守

康德 年 月 日
昭和 年 月 日
於新京繕成本書兩份

滿洲帝國 外交部 大臣
滿洲帝國駐劄大日本帝國特命全權大使

三

附屬協定

當本日署名關於在滿洲國日本國臣民居住及滿洲國課稅等之滿洲國與日本國間條約兩國全權委員協定如左

第一條

滿洲國政府為將日本國臣民向有之商租權按照其內容變更為土地所有權其他關於土地之權利起見應速執必要措置

第二條

依照條約第二條規定日本國臣民應服從之關於滿洲國課稅產業等之行政法令範圍及其適用態樣應由滿洲國帝國外交部大臣與滿洲帝國駐劄大日本帝國特命全權大使之間預先協議決定

依照前項規定日本國臣民應服從之滿洲國法令由滿洲國政府擬加重要變更時迄至日本國臣民服從滿洲國裁判管轄權間應預先經滿洲帝國駐劄大日本帝國特命全權大使承認

依照本條第一項規定條約實施後應即協議決定之滿洲國法令概以關於地稅契稅營業稅法人營業稅出產糧石稅木稅鑛業稅鑛業登錄稅酒稅捲菸稅統稅商業登記稅特許登錄稅意匠登錄稅及地方稅之課稅

法令並關於工業所有權度量衡計量鑛業市場畜產金融及專賣之行政法令為限
 滿洲國政府當將前項所載各稅之中營業稅及法人營業稅並地方稅之中房捐及戶別捐課於日本國臣民
 條約實施後暫時遵照由滿洲帝國外交部大臣與滿洲帝國駐劄大日本帝國特命全權大使之間所預先協
 議決定應適用輕減稅率而地方稅之中營業稅附加捐應以依上開輕減稅率之稅額為基準但條約實施後
 應即適用之輕減稅率關於營業稅戶別捐及賦課於個人之房捐者應為原稅率之四分之一而關於法人營
 業稅及賦課於法人之房捐者應為原稅率之三分之一

第三條

依照條約第二條規定日本國臣民應服從之滿洲國法令對於日本國臣民之適用及執行須經司法程序者
 迄至日本國臣民服從滿洲國裁判管轄權間由日本國領事官行之
 於前項情形日本國領事官應遵照領事裁判之一般準則適用滿洲國該項法令但上開法令所載刑之中稱
 有期徒刑者視為懲役或禁錮稱拘役者懲役或禁錮或拘留稱罰金者罰金或科料稱過怠金者過料而適用
 之

依照本條規定有論知罰金科料過料或沒收者其罰金科料過料或沒收物均歸滿洲國政府

第四條

日本國政府應遵照另與滿洲國政府所協定至遲康德四年十二月三十一日即昭和十二年十二月三十一
 日以前將在滿洲國領域內行政警察撤廢或移讓而迄至該撤廢或移讓間條約第二條所載滿洲國法令之
 中關於課稅者及特與在南滿洲鐵道附屬地行政警察有關係者均應不施行於該附屬地上開特與在南滿
 洲鐵道附屬地行政警察有關係法令之範圍應由滿洲帝國外交部大臣與滿洲帝國駐劄大日本帝國特命
 全權大使之間預先協議決定
 滿洲國政府應鑒於前項規定整備其警察制度且關於接收關係日本方面施設及其職員作為必要準備
 日本國政府迄至移讓在南滿洲鐵道附屬地行政警察間為確保在該附屬地內外日本國臣民課稅上負擔
 均衡起見應自條約實施之日起在該附屬地實施務與滿洲國課於日本國臣民之國稅相同之課稅
 滿洲國政府非經遵照滿口兩國政府另所協定處理在南滿洲鐵道附屬地南滿洲鐵道株式會社關於土木
 教育衛生等之施設後應在該附屬地不課地方稅

第五條

依照條約第二條規定滿洲國法令施行於南滿洲鐵道附屬地與其同時滿洲國政府應遵照由滿洲帝國外
 交部大臣與滿洲帝國駐劄大日本帝國特命全權大使之間所預先協議決定於該施行當時之狀態接收關
 係日本方面施設及其職員

第六條

對於關於依照條約第二條規定日本國臣民應服從之滿洲國法令之滿洲國該管官憲行政處分日本國臣民遇有不服者滿洲國政府應關於其救正講適當措置

第七條

遵照本協定條款由滿洲帝國外交部大臣與滿洲帝國駐劄大日本帝國特命全權大使之間經協議決定之事項及由滿洲國政府經該大使承認之事項應各在滿日兩國政府公報佈告之

第八條

本協定當與條約同時實施之

爲此兩國全權委員將本協定署名蓋印以昭信守

康德 年月 日
昭和 年月 日
訂於新京

滿洲帝國 外交部 大臣
滿洲帝國駐劄大日本帝國特命全權大使

關於關於在滿洲國日本國臣民居住及滿洲國課稅等之滿洲國與日本國間條約及附屬協定滿日兩國全權委員間了解事項

第一 係附條約第一條

在未開放蒙地日本國臣民取得關於土地之權利者必須呈經滿洲國該管官憲核准

第二 係附條約第二條

一 滿洲國政府鑒於在滿洲國領域內日本人居留民團體現在經營日本國臣民教育事業之實情應遵照由滿洲帝國外交部大臣與滿洲帝國駐劄大日本帝國特命全權大使之間所協議決定每年分擔日本國臣民教育事業所要之經費

二 滿洲國政府應更加整備現行租稅制度

三 滿洲國政府當適用依照條約第二條規定日本國臣民應服從之滿洲國法令應關於保護日本國臣民依日本國之法令或慣行現在享受之權利或利益講必要措置

第三 係附屬協定第四條

關於對於在南滿洲鐵道附屬地內出產而在該附屬地外消費之物品及在該附屬地外出產而在該附屬

地内消費之物品消費稅之賦課徵收者應由滿日兩國該管官憲間協議決定

一〇

康德 年 月 日
昭 和 年 月 日
於新 京

關於滿洲國稅務之協定
日本國政府與滿洲國政府
於一千九百二十六年三月三日
在東京簽訂

本公文ハ條約實施後モ之ヲ公表セズ

交
換
公
文
案

(昭和十一年四月二十二日 印刷)

(往翰)

以書翰啓上致候陳者本日署名ノ滿洲國ニ於ケル日本國臣民ノ居住及滿洲國ノ課稅等ニ關スル日本國滿洲國間條約ニ關シ本使ト閣下トノ間ニ左記了解成立致候

- 一 滿洲國政府ハ日本國臣民ノ課稅標準決定ニ付其ノ適正ヲ期スル爲當該稅務官憲ヲシテ日本人居留民團體其ノ他適當ナル者ニ課稅上參考ト爲ルベキ事項ヲ諮問セシムベシ
 - 二 滿洲國政府ハ日本國臣民ニ對スル租稅ノ賦課徵收事務及日本國臣民ノ經營スル金融機關ニ對スル直接監督事務ハ成ルベク日本人官吏ヲシテ之ニ當ラシムベシ
- 本使ハ閣下ニ於テ右了解ヲ確認セラレンコトヲ希望致候
本使ハ茲ニ閣下ニ向テ敬意ヲ表シ候 敬具

昭和 年 月 日新京ニ於テ

滿洲帝國駐劄大日本帝國特命全權大使

滿洲帝國外交部大臣

閣下

滿洲國政府關於日本國臣民之課稅標準為期其適正起見應使該管稅務官憲向日本人
居留團體其他適當之者諮問課稅上可供參考之事項

一 滿洲國政府應將對於日本國臣民之租稅之賦課徵收事務及對於日本國臣民所經營金融機關之
直接監督事務使日本人官吏辦理
二 滿洲國政府應將對於日本國臣民之租稅之賦課徵收事務及對於日本國臣民所經營金融機關之
直接監督事務使日本人官吏辦理
三 滿洲國政府應將對於日本國臣民之租稅之賦課徵收事務及對於日本國臣民所經營金融機關之
直接監督事務使日本人官吏辦理

(來翰)

滿洲帝國外交部大臣

照復事接准

貴大使本日照會內有左開事項業經閱悉

關於本日署名之關於在滿洲國日本國臣民居住及滿洲國課稅等之滿洲國與日本國間條約本使與
閣下之間成立下開了解

一 滿洲國政府關於決定對於日本國臣民之課稅標準為期其適正起見應使該管稅務官憲向日本人
居留團體其他適當之者諮問課稅上可供參考之事項

二 滿洲國政府應將對於日本國臣民之租稅之賦課徵收事務及對於日本國臣民所經營金融機關之
直接監督事務使日本人官吏辦理

本大使希望閣下對於上開了解予以確認

本大臣對於前述了解予以確認相應照復
貴大使查照可也須至照會者

右照會

滿洲帝國駐劄大日本帝國特命全權大使
康德 年 月 日於新京

四

(來翰譯文)

以書翰啓上致候陳者本日附貴翰ヲ以テ左ノ如ク御申越相成敬承致候

「陳者本日署名ノ滿洲國ニ於ケル日本國臣民ノ居住及滿洲國ノ課稅等ニ關スル日本國滿洲國間條約ニ關シ本使ト閣下トノ間ニ左記了解成立致候

- 一 滿洲國政府ハ日本國臣民ノ課稅標準決定ニ付其ノ適正ヲ期スル爲當該稅務官憲ヲシテ日本人居留民團體其ノ他適當ナル者ニ課稅上參考ト爲ルベキ事項ヲ諮問セシムベシ
- 二 滿洲國政府ハ日本國臣民ニ對スル租稅ノ賦課徵收事務及日本國臣民ノ經營スル金融機關ニ對スル直接監督事務ハ成ルベク日本人官吏ヲシテ之ニ當ラシムベシ

本使ハ閣下ニ於テ右了解ヲ確認セラレンコトヲ希望致候」

本大臣ハ茲ニ前記了解ヲ確認致候 敬具

康德 年 月 日新京ニ於テ

滿洲帝國外交部大臣

滿洲帝國駐劄大日本帝國特命全權大使

閣下

五

一滿洲國ニ於ケル日本國臣民ノ居住及滿洲國ノ課稅等ニ關
スル日本國滿洲國間條約締結茲關係公文交換ノ件
右別紙ノ通本院ニ於テ決議上奏候條此段
及通牒候也

昭和十一年六月三日

樞密院議長男爵平沼騏一郎

內閣總理大臣廣田弘毅殿

臣等滿洲國ニ於ケル日本國臣民ノ居住及滿洲國ノ課稅等ニ
關スル日本國滿洲國間條約締結茲關係公文交換ノ件
諮詢ノ命ヲ恪ニ本月三 日ヲ以テ審議ヲ
盡シ之ヲ可決セリ乃チ謹テ上奏シ更ニ
聖明ノ採擇ヲ仰ク

昭和十一年六月三日

樞密院議長男爵臣平沼騏一郎

秘

滿洲國ニ於ケル日本國臣民ノ居住及滿洲國ノ
課稅等ニ關スル日本國滿洲國間條約

滿洲國ニ於ケル日本國臣民ノ居住及滿洲國ノ課稅等ニ關スル日本
國滿洲國間條約

大日本帝國政府ハ昭和七年九月十五日調印ノ日本國滿洲國間議定書ノ趣旨ニ據リ滿洲國ノ健全ナ
ル發達ヲ促進シ且日滿兩國間ニ現存スル緊密不可分ノ關係ヲ永遠ニ鞏固ナラシムル爲現ニ日本國
ガ滿洲國ニ於テ有スル治外法權ヲ漸進的ニ撤廢シ且南滿洲鐵道附屬地行政權ヲ調整乃至移讓スル
コトニ決シタルニ因リ

滿洲帝國政府ハ右日本國政府ノ決定ヲ多トスルト共ニ之ニ對應シテ日滿兩國臣民ノ滿洲國領域内
ニ於ケル融合發展ヲ確保増進スルノ必要ナルヲ認メタルニ因リ
兩國政府ハ日本國ガ滿洲國ニ於テ有スル治外法權及南滿洲鐵道附屬地行政權ニ關シ先ヅ日本國臣
民ノ居住及各種權利利益ノ享有並ニ滿洲國ノ課稅、産業等ニ關スル法令ノ適用ニ付左ノ通協定セ
リ

第一條

日本國臣民ハ滿洲國ノ領域内ニ於テ自由ニ居住往來シ農業、商工業其ノ他公私各種ノ業務及職務

ニ従事スルコトヲ得ベク且土地ニ關スル一切ノ權利ヲ享有スベシ

日本國臣民ハ滿洲國ノ領域内ニ於テ一切ノ權利ノ享有及利益ノ享受ニ關シ滿洲國臣民ニ比シ不利
益ナル待遇ヲ受クルコトナカルベシ

第二條

日本國臣民ハ滿洲國ノ領域内ニ於テ本條約附屬協定ノ定ムル所ニ從ヒ同國ノ課税、産業等ニ關ス
ル行政法令ニ服スベシ

滿洲鐵道附屬地ニ在リテハ日本國政府ハ前項ノ滿洲國法令ガ本條約附屬協定ノ定ムル所ニ從ヒ
屬地的ニ施行セララルコトヲ承認ス

本條ノ適用ニ關シ日本國臣民ハ如何ナル場合ニ於テモ滿洲國臣民ニ比シ不利益ナル待遇ヲ受クル
コトナカルベシ

第三條

前二條ノ規定ハ之ヲ法人ニ適用シ得ル限リ日本國法人ニ適用スルモノトス

第四條

本條約ノ規定ハ日滿兩國間ノ特別ノ約定ニ基ク特定ノ日本國ノ臣民又ハ法人ノ權利、特權、特典

及免除ニ影響ヲ及ボサザルモノトス

第五條

本條約ハ昭和十一年七月一日即チ康德三年七月一日ヨリ實施セララルベシ

第六條

本條約ノ正文ハ日本文及漢文トシ日本文本文ト漢文本文トノ間ニ解釋ヲ異ニスルトキハ日本文本
文ニ依リ之ヲ決ス

右證據トシテ下名ハ各本國政府ヨリ正當ノ委任ヲ受ケ本條約ニ署名調印セリ

昭和 年 月 日即チ康德 年 月 日新京ニ於テ本書ニ通テ作成ス

滿洲帝國駐劄大日本帝國特命全權大使

滿洲帝國外交部大臣

附屬協定

本日滿洲國ニ於ケル日本國臣民ノ居住及滿洲國ノ課稅等ニ關スル日本國滿洲國間條約ニ署名スルニ當リ兩國全權委員ハ左ノ通協定セリ

第一條

滿洲國政府ハ從來日本國臣民ノ有スル商租權ヲ其ノ内容ニ應ジ土地所有權其ノ他ノ土地ニ關スル權利ニ變更スル爲速ニ必要ノ措置ヲ執ルベシ

第二條

條約第二條ノ規定ニ依リ日本國臣民ノ服スベキ滿洲國ノ課稅、産業等ニ關スル行政法令ノ範圍及其ノ適用ノ態様ハ豫メ滿洲帝國駐劄大日本帝國特命全權大使ト滿洲帝國外交部大臣トノ間ニ協議決定セラルベシ

前項ノ規定ニ依リ日本國臣民ノ服スベキ滿洲國法令ニ付滿洲國政府ニ於テ重要ナル變更ヲ加ヘントスルトキハ日本國臣民ガ滿洲國ノ裁判管轄權ニ服スルニ至ル迄豫メ滿洲帝國駐劄大日本帝國特命全權大使ノ承認ヲ經ベシ

本條第一項ノ規定ニ依リ條約實施後直ニ協議決定セラルベキ滿洲國法令ハ概ネ地稅、契稅、營業稅、法人營業稅、出產糧石稅、木稅、鑛業稅、鑛業登錄稅、酒稅、捲菸稅、統稅、商業登記稅、特許登錄稅、意匠登錄稅及地方稅ニ關スル課稅法令並ニ工業所有權、度量衡、計量、鑛業、市場、畜產、金融及專賣ニ關スル行政法令ニ限ラルベシ

滿洲國政府ハ前項ニ掲グル諸稅中營業稅及法人營業稅並ニ地方稅中房捐及戶別捐ヲ日本國臣民ニ課スルニ當リテハ條約實施後當分ノ內豫メ滿洲帝國駐劄大日本帝國特命全權大使ト滿洲帝國外交部大臣トノ間ニ協議決定セラルル所ニ從ヒ輕減稅率ヲ適用スベク地方稅中營業稅附加捐ハ右輕減稅率ニ依ル稅額ヲ基準トスベシ但シ條約實施後直ニ適用スベキ輕減稅率ハ營業稅、戶別捐及個人ニ賦課スル房捐ニ付テハ原稅率ノ四分ノ一タルベク法人營業稅及法人ニ賦課スル房捐ニ付テハ原稅率ノ三分ノ一タルベシ

第三條

條約第二條ノ規定ニ依リ日本國臣民ノ服スベキ滿洲國法令ノ日本國臣民ニ對スル適用及執行ニシテ司法手續ニ依ルベキモノハ日本國臣民ガ滿洲國ノ裁判管轄權ニ服スルニ至ル迄日本國領事官ニ於テ之ヲ行フモノトス

前項ノ場合ニ於テハ日本國領事官ハ領事裁判ノ一般準則ニ從ヒ滿洲國當該法令ヲ適用スベシ但シ右法令ニ掲グル刑ノ中有期徒刑トアルハ懲役又ハ禁錮、拘役トアルハ懲役若ハ禁錮又ハ拘留、罰金トアルハ罰金又ハ科料、過怠金トアルハ過料ト看做シテ之ヲ適用スベシ
本條ノ規定ニ依リ罰金、科料、過料又ハ沒收ノ言渡アリタル場合ニ於テ其ノ罰金、科料、過料又ハ沒收物ハ滿洲國政府ニ歸屬スベシ

第四條

日本國政府ハ別ニ滿洲國政府ト協定スル所ニ從ヒ遲クトモ昭和十二年十二月三十一日即チ康德四年十二月三十一日迄ニ滿洲國領域内ニ於ケル行政警察ヲ撤廢又ハ移讓スベク右撤廢又ハ移讓ニ至ル迄ハ條約第二條ノ滿洲國法令中課稅ニ關スルモノ及特ニ南滿洲鐵道附屬地ニ於ケル行政警察ト關係アルモノハ同附屬地ニ施行セラレザルベシ右ノ特ニ南滿洲鐵道附屬地ニ於ケル行政警察ト關係アル法令ノ範圍ハ豫メ滿洲帝國駐劄大日本帝國特命全權大使ト滿洲帝國外交部大臣トノ間ニ協議決定セラルベシ

滿洲國政府ハ前項ノ規定ニ鑑ミ其ノ警察制度ヲ整備スベク且關係日本側ノ施設及職員ノ引繼ニ付必要ナル準備ヲ爲スベシ

日本國政府ハ南滿洲鐵道附屬地ニ於ケル行政警察ノ移讓ニ至ル迄同附屬地内外ニ於ケル日本國臣民ノ課稅上ノ負擔均衡ヲ確保スル爲條約實施ノ日ヨリ滿洲國ガ日本國臣民ニ課スル國稅ト成ルベク同様ノ課稅ヲ同附屬地ニ於テ實施スベシ
滿洲國政府ハ日滿兩國政府ガ別ニ協定スル所ニ從ヒ南滿洲鐵道附屬地ニ於ケル南滿洲鐵道株式會社ノ土木、教育、衛生等ニ關スル施設ノ處理ヲ經タル後ニ非ザレバ同附屬地ニ於テ地方稅ヲ課セザルベシ

第五條

條約第二條ノ規定ニ依リ滿洲國法令ガ南滿洲鐵道附屬地ニ施行セラルト同時ニ滿洲國政府ハ豫メ滿洲帝國駐劄大日本帝國特命全權大使ト滿洲帝國外交部大臣トノ間ニ協議決定セララル所ニ從ヒ關係日本側ノ施設及職員ヲ右施行當時ノ狀態ニ於テ引繼グベシ

第六條

條約第二條ノ規定ニ依リ日本國臣民ノ服スベキ滿洲國法令ニ關スル滿洲國當該官憲ノ行政處分ニ對シ日本國臣民ニ於テ不服アルトキハ滿洲國政府ハ之ガ救正ニ付適當ナル措置ヲ講ズベシ

第七條

本協定ノ條項ニ從ヒ滿洲帝國駐劄大日本帝國特命全權大使ト滿洲帝國外交部大臣トノ間ニ協議決定セラレタル事項及滿洲國政府ガ同大使ノ承認ヲ經タル事項ハ夫々日滿兩國ノ官報ニ公示セラレベシ

第八條

本協定ハ條約ト同時ニ實施セララルベシ

右證據トシテ兩國全權委員ハ本協定ニ署名調印セリ

昭和 年 月 日即チ康德 年 月 日新京ニ於テ之ヲ作成ス

滿洲帝國駐劄大日本帝國特命全權大使

滿洲帝國外交部大臣

滿洲國ニ於ケル日本國臣民ノ居住及滿洲國ノ課稅等ニ關スル日本
國滿洲國間條約及附屬協定ニ關スル日滿兩國全權委員間了解事項

第一 條約第一條ニ付

未開放蒙地ニ於テ日本國臣民ガ土地ニ關スル權利ヲ取得スル場合ニハ滿洲國當該官憲ノ許可ヲ
要スルモノトス

第二 條約第二條ニ付

- 一 滿洲國政府ハ滿洲國領域内ニ於テ現ニ日本人居留民團體ガ日本國臣民ノ教育事業ヲ經營シ
居ルノ事情ニ鑑ミ滿洲帝國駐劄大日本帝國特命全權大使ト滿洲帝國外交部大臣トノ間ニ協議
決定セラルル所ニ從ヒ日本國臣民ノ教育事業ニ要スル費用ヲ毎分擔スベシ
- 二 滿洲國政府ハ現行租稅制度ヲ更ニ整備スベシ
- 三 滿洲國政府ハ條約第二條ノ規定ニ依リ日本國臣民ノ服スベキ滿洲國法令ノ適用ニ當リ日本
國臣民ガ日本國法令又ハ慣行ニ依リ現ニ享受スル權利又ハ利益ノ保護ニ付必要ナル措置ヲ講
ズベシ

第三 附屬協定第四條ニ付

南滿洲鐵道附屬地内ニ於テ生産セラレ同附屬地外ニ於テ消費セラルル物品及同附屬地外ニ於テ生産セラレ同附屬地内ニ於テ消費セラルル物品ニ對スル消費税ノ賦課徴收ニ關シテハ日滿兩國當該官憲間ニ於テ協議決定スベシ

昭和 年 月 日即チ康德 年 月 日新京ニ於テ

秘

關於在滿洲國日本國臣民居住及滿洲國
課稅等之滿洲國與日本國間條約

(昭和十一年四月二十二日 印刷)

關於在滿洲國日本國臣民居住及滿洲國課稅等之滿洲國與日本國間
條約

茲因大日本帝國政府決定爲依據昭和七年九月十五日蓋印之滿洲國日本國間議定書之主旨促進滿洲國健全發達且使滿日兩國間現存緊密不可分之關係永遠鞏固起見將現在日本國在滿洲國所有之治外法權逐漸撤廢且將南滿洲鐵道附屬地行政權調整乃至移讓

又因滿洲帝國政府以上開日本國政府之決定多之而同時認爲對應於此將滿日兩國臣民在滿洲國領域內融合發展確保增進之必要

兩國政府關於日本國在滿洲國所有之治外法權及南滿洲鐵道附屬地行政權先對於日本國臣民居住及各種權利利益之享有並關於滿洲國課稅產業等之法令之適用協定如左

第一條

日本國臣民應得在滿洲國領域內任便居住往來並從事農業工商業其他公私各種生意及職務且享有關於土地之一切權利

日本國臣民應關於在滿洲國領域內所有權利之享有及利益之享受不受較次於滿洲國臣民之待遇

附屬協定

當本日署名關於在滿洲國日本國臣民居住及滿洲國課稅等之滿洲國與日本國間條約兩國全權委員協定如左

第一條

滿洲國政府為將日本國臣民向有之商租權按照其內容變更為土地所有權其他關於土地之權利起見應速執必要措置

第二條

依照條約第二條規定日本國臣民應服從之關於滿洲國課稅產業等之行政法令範圍及其適用態樣應由滿洲帝國外交部大臣與滿洲帝國駐劄大日本帝國特命全權大使之間預先協議決定
依照前項規定日本國臣民應服從之滿洲國法令由滿洲國政府擬加重要變更時迄至日本國臣民服從滿洲國裁判管轄權間應預先經滿洲帝國駐劄大日本帝國特命全權大使承認
依照本條第一項規定條約實施後應即協議決定之滿洲國法令概以關於地稅契稅營業稅法人營業稅出產糧石稅木稅礦業稅鑛業登錄稅酒稅捲菸稅統稅商業登記稅特許登錄稅意匠登錄稅及地方稅之課稅

法令並關於工業所有權度量衡計量鑛業市場產金融及專賣之行政法令爲限

六

滿洲國政府當將前項所載各稅之中營業稅及法人營業稅並地方稅之中房捐及戶別捐課於日本國臣民條約實施後暫時遵照由滿洲帝國外交部大臣與滿洲帝國駐劄大日本帝國特命全權大使之間所預先協議決定應適用輕減稅率而地方稅之中營業稅附加捐應以依上開輕減稅率之稅額爲基準但條約實施後應即適用之輕減稅率關於營業稅戶別捐及賦課於個人之房捐者應爲原稅率之四分之一而關於法人營業稅及賦課於法人之房捐者應爲原稅率之三分之一

第三條

依照條約第二條規定日本國臣民應服從之滿洲國法令對於日本國臣民之適用及執行須經司法程序者迄至日本國臣民服從滿洲國裁判管轄權間由日本國領事官行之

於前項情形日本國領事官應遵照領事裁判之一般準則適用滿洲國該項法令但上開法令所載刑之中稱有期徒刑者視爲懲役或禁錮稱拘役者懲役或禁錮或拘留稱罰金者罰金或科料稱過怠金者過料而適用之

依照本條規定有論知罰金科料過料或沒收者其罰金科料過料或沒收物均歸滿洲國政府

第四條

日本國政府應遵照另與滿洲國政府所協定至遲康德四年十二月三十一日即昭和十二年十二月三十一日以前將在滿洲國領域內行政警察撤廢或移讓而迄至該撤廢或移讓間條約第二條所載滿洲國法令之中關於課稅者及特與在南滿洲鐵道附屬地行政警察有關係者均應不施行於該附屬地上開特與在南滿洲鐵道附屬地行政警察有關係法令之範圍應由滿洲帝國外交部大臣與滿洲帝國駐劄大日本帝國特命全權大使之間預先協議決定

滿洲國政府應鑒於前項規定整備其警察制度且關於接收關係日本方面施設及其職員作爲必要準備日本國政府迄至移讓在南滿洲鐵道附屬地行政警察間爲確保在該附屬地內外日本國臣民課稅上負擔均衡起見應自條約實施之日起在該附屬地實施務與滿洲國課於日本國臣民之國稅相同之課稅滿洲國政府非經遵照滿日兩國政府另所協定處理在南滿洲鐵道附屬地南滿洲鐵道株式會社關於土木教育衛生等之施設後應在該附屬地不課地方稅

第五條

依照條約第二條規定滿洲國法令施行於南滿洲鐵道附屬地與其同時滿洲國政府應遵照由滿洲帝國外交部大臣與滿洲帝國駐劄大日本帝國特命全權大使之間所預先協議決定於該施行當時之狀態接收關係日本方面施設及其職員

七

第六條

對於關於依照條約第二條規定日本國臣民應服從之滿洲國法令之滿洲國該管官憲行政處分日本國臣民遇有不服者滿洲國政府應關於其救正講適當措置

第七條

遵照本協定條款由滿洲帝國外交部大臣與滿洲帝國駐劄大日本帝國特命全權大使之間經協議決定之事項及由滿洲國政府經該大使承認之事項應各在滿日兩國政府公報佈告之

第八條

本協定當與條約同時實施之

爲此兩國全權委員將本協定署名蓋印以昭信守

康德 年 月 日 訂於新京

昭和 年 月 日

滿洲帝國 外交部 大臣

滿洲帝國駐劄大日本帝國特命全權大使

關於關於在滿洲國日本國臣民居住及滿洲國課稅等之滿洲國與日本國間條約及附屬協定滿日兩國全權委員間了解事項

第一 係附條約第一條

在未開放蒙地日本國臣民取得關於土地之權利者必須呈經滿洲國該管官憲核准

第二 係附條約第二條

一 滿洲國政府鑒於在滿洲國領域內日本人居留民團體現在經營日本國臣民教育事業之實情應遵照由滿洲帝國外交部大臣與滿洲帝國駐劄大日本帝國特命全權大使之間所協議決定每年分擔日本國臣民教育事業所要之經費

二 滿洲國政府應更加整備現行租稅制度

三 滿洲國政府當適用依照條約第二條規定日本國臣民應服從之滿洲國法令應關於保護日本國臣民依日本國之法令或慣行現在享受之權利或利益講必要措置

第三 係附屬協定第四條

關於對於在南滿洲鐵道附屬地內出產而在該附屬地外消費之物品及在該附屬地外出產而在該附屬

地内消費之物品消費稅之賦課徵收者應由滿日兩國該管官憲間協議決定

康德 年月 日
昭和 年月 日
於新京

極秘

交換公文案

本公文ハ條約實施後モ之ヲ公表セズ

(昭和十一年四月二十二日 印刷)

(往翰)

以書翰啓上致候陳者本日署名ノ滿洲國ニ於ケル日本國臣民ノ居住及滿洲國ノ課稅等ニ關スル日本國滿洲國間條約ニ關シ本使ト閣下トノ間ニ左記了解成立致候

- 一 滿洲國政府ハ日本國臣民ノ課稅標準決定ニ付其ノ適正ヲ期スル爲當該稅務官憲ヲシテ日本人居留團體其ノ他適當ナル者ニ課稅上參考ト爲ルベキ事項ヲ諮問セシムベシ
 - 二 滿洲國政府ハ日本國臣民ニ對スル租稅ノ賦課徵收事務及日本國臣民ノ經營スル金融機關ニ對スル直接監督事務ハ成ルベク日本人官吏ヲシテ之ニ當ラシムベシ
- 本使ハ閣下ニ於テ右了解ヲ確認セラレシコトヲ希望致候
本使ハ茲ニ閣下ニ向テ敬意ヲ表シ候 敬具

昭和 年 月 日新京ニ於テ

滿洲帝國駐劄大日本帝國特命全權大使

滿洲帝國外交部大臣

閣下

(來翰)

滿洲帝國外交部大臣

照復事接准

貴大使本日照會內有左開事項業經閱悉

爲

關於本日署名之關於在滿洲國日本國臣民居住及滿洲國課稅等之滿洲國與日本國間條約本使與閣下之間成立下開了解

一 滿洲國政府關於決定對於日本國臣民之課稅標準爲期其適正起見應使該管稅務官憲向日本人居留民團體其他適當之者諮問課稅上可供參考之事項

二 滿洲國政府應將對於日本國臣民之租稅之賦課徵收事務及對於日本國臣民所經營金融機關之直接監督事務使日本官吏辦理

本大使希望閣下對於上開了解予以確認

本大臣對於前述了解予以確認相應照復

貴大使查照可也須至照會者

右照會

滿洲帝國駐劄大日本帝國特命全權大使
康德 年 月 日於新京

(來翰譯文)

以書翰啓上致候陳者本日附貴翰ヲ以テ左ノ如ク御申越相成敬承致候

「陳者本日署名ノ滿洲國ニ於ケル日本國臣民ノ居住及滿洲國ノ課稅等ニ關スル日本國滿洲國間
條約ニ關シ本使ト閣下トノ間ニ左記了解成立致候

- 一 滿洲國政府ハ日本國臣民ノ課稅標準決定ニ付其ノ適正ヲ期スル爲當該稅務官憲ヲシテ日本
人居留民團體其ノ他適當ナル者ニ課稅上參考ト爲ルベキ事項ヲ諮問セシムベシ
- 二 滿洲國政府ハ日本國臣民ニ對スル租稅ノ賦課徵收事務及日本國臣民ノ經營スル金融機關ニ
對スル直接監督事務ハ成ルベク日本人官吏ヲシテ之ニ當ラシムベシ

本使ハ閣下ニ於テ右了解ヲ確認セラレシコトヲ希望致候」
本大臣ハ茲ニ前記了解ヲ確認致候
本大臣ハ茲ニ閣下ニ向テ敬意ヲ表シ候 敬具

康德 年 月 日新京ニ於テ

滿洲帝國外交部大臣

滿洲帝國駐劄大日本帝國特命全權大使 閣下

秘

一滿洲國ニ於ケル日本國臣民、居住及滿洲國ノ課稅等、
關スル日本國滿洲國間條約締結並關係公文交接ノ件
右審査報告書一通特、及送付候也

昭和十一年六月三日

樞密院書記官長村上恭一



內閣書記官長藤沼左平殿

圖書實

圖書實



川島

田

田

外甲 二九ノ属

樞密院

秘

滿洲國ニ於ケル日本國臣民ノ居住及滿洲國ノ課税等ニ關スル日本國滿洲國間條約締結並關係公文交換ノ件審査報告

今回御諮詢ノ滿洲國ニ於ケル日本國臣民ノ居住及滿洲國ノ課税等ニ關スル日本國滿洲國間條約締結並關係公文交換ノ件ニ付本官等審査委員タルノ命ヲ承ケ其ノ事案ノ特ニ關要ナルヲ思ヒ去ル五月四日以來八回ノ會同ヲ重ネ當局大臣及關係諸官ノ辯明ヲ聽取シ以テ慎重ニ之ガ審議ヲ遂ゲタリ

抑々帝國ノ滿洲國ニ對スル國策ノ基調トスル所ハ曩ニ昭和八年三月換發セラレタル國際聯盟脫退ニ關スル詔書及同七年九月調印ノ日滿議定書ヲ以テ宣明セラレタルが如ク滿洲國ヲシテ帝國ト不可分ノ關係ヲ持シツツ獨立國トシテ健全ナル發達ヲ爲サシムルニ在リ爾來滿洲國諸般ノ施設ハ其ノ發達漸ク見ルベキモノアリ日滿兩國ノ關係モ亦益々緊密ノ度ヲ加ヘタリ然ルニ帝國政府ノ見ル所ニ依レバ滿洲國ニ於テ現ニ帝國ガ條約上享有スル治外法權ハ我が對滿國策ノ進捗ニ伴

滿洲

二二六八五

滿一

ヒ漸次其ノ重要性ヲ失フニ至リシノミナラズ
今後滿洲國ヲシテ健全ナル發達ヲ遂ゲシムル
ト共ニ日滿兩國臣民ノ完全ナル融合ヲ實現シ
滿洲國ニ於ケル帝國臣民ノ全面的發展ヲ可能
且確實ナラシメ進ンデ兩國ノ特殊關係ヲ永遠
ニ鞏固ナラシムル爲メニ寧口機ヲ見テ之ヲ撤
廢スルヲ適當トス加之英米其ノ他ノ諸國が滿
洲國ニ於テ現ニ事實上治外法權ト同様ノ地位
ヲ保持セルハ同國ノ健全ナル發達ニ著シキ障
碍ヲ及ボスモノナルニ由リ帝國が率先シテ其

ノ治外法權ヲ撤廢シ以テ右等諸國ヲシテ之ニ
準ジ其ノ事實上ノ治外法權的地位ヲ拋棄セシムル
ヲ必要トス又南滿洲鐵道附屬地ニ於ケル帝國ノ行政
權ハ同附屬地ト附屬地外地域トノ關係ニ考ヘ右治
外法權ノ撤廢ト步調ヲ合セテ漸次之ヲ調整乃至移
讓スルヲ妥當トス凡ソ斯クノ如キ理由ノ下ニ帝國政
府ハ昨年八月滿洲國ニ於ケル治外法權ノ漸進
的撤廢及之ニ伴フ南滿洲鐵道附屬地行政權ノ
調整乃至移讓ニ關スル根本方針ヲ決定シ爾來
關係官廳ヲシテ之が具體的方策ヲ攻究セシメ

タルニ之ト同時ニ滿洲國政府ニ於テモ銳意諸
制度ノ改善ニ努力シタル結果最近ニ至リ右治
外法權ノ撤廢及行政權ノ調整乃至移讓ノ實行
ニ著手スルノ氣運熟シ兩國政府當局ニ於テ交
渉ヲ遂ゲ其ノ第一歩トシテ帝國ニ於テハ滿洲
國ノ行政法令ノ一部ヲ同國在住ノ帝國臣民ニ
適用スルコトヲ承認シ滿洲國ニ於テハ帝國臣
民ニ對シテ内地ヲ開放シ滿洲國在住帝國臣民
ノ生活ニ急激ナル變動ヲ與ヘズシテ滿洲國全
領域ニ於ケル帝國臣民ノ安住發展ヲ確保スルコ

トヲ承認シ此ノ相互ノ承認ヲ根幹トスル取極
ヲ締結スルコトニ協議調ヒ乃チ爰ニ本院ニ御
諮詢アラセラレタル本條約及附屬文書案ノ成
立ヲ見ルニ至レリ

本條約ハ前文及末文ノ外本文六條ヨリ成リ別
ニ附屬協定、日滿兩國全權委員間了解事項及交
換公文ヲ伴フ今順次其ノ要旨ヲ摘示スレバ次
ノ如シ

第一條約

(一) 日本國臣民及法人ハ滿洲國ノ領域内ニ於

テ自由ニ居住往來ニ農商工業其ノ他公私
各種ノ業務及職務ニ從事シ且土地ニ關ス
ル一切ノ權利ヲ享有スルコトヲ得ベク其
ノ一切ノ權利利益ニ關シ滿洲國臣民及法
人ニ比シテ不利益ナル待遇ヲ受クルコト
ナキモノトス(第一條及
第三條)

(二) 日本國臣民及法人ハ滿洲國ノ領域内ニ於
テ附屬協定ノ定ムル所ニ從ヒ同國ノ課税
産業等ニ關スル行政法令ニ服スベク此ノ
場合ニ於テモ日本國臣民及法人ハ滿洲國

臣民及法人ニ比シ不利益ナル待遇ヲ受ク
ルコトナキモノトシ日本國政府ハ右滿洲
國法令ガ附屬協定ノ定ムル所ニ從ヒ南滿
洲鐵道附屬地ニ屬地的ニ施行セラルルコ
トヲ承認ス(第二條及
第三條)

(三) 本條約ノ規定ハ日滿兩國間ノ特約ニ基ク
特定ノ日本國臣民又ハ法人ノ權利特權特
典及免除ニハ影響ヲ及ボサザルモノトス

(第四條)

(四) 本條約ハ本年七月一日ヨリ之ヲ實施スル

モノトス(第五條)

(五) 本條約ハ日本文及漢文ヲ以テ共ニ正文トシ兩本文ノ間ニ解釋ヲ異ニスルトキハ日本文本文ニ依リテ之ヲ決スベキモノトス

(第六條)

第二 附屬協定

(一) 滿洲國政府ハ從來日本國臣民ガ有スル商租權ヲ其ノ内容ニ應ジテ土地所有權其ノ他ノ土地ニ關スル權利ニ變更スル爲メ速ニ必要ノ措置ヲ執ルベキモノトス(第二條)

(二) 前記條約ノ規定ニ依リ日本國臣民ノ服スベキ滿洲國ノ行政法令ノ範圍及其ノ適用ノ態様ハ豫メ駐滿帝國大使ト滿洲國外交部大臣トノ間ニ之ヲ協定スベク滿洲國政府ガ右法令ニ重要ナル變更ヲ加ヘントスルトキハ日本國臣民ガ滿洲國ノ裁判管轄權ニ服スルニ至ル迄ハ豫メ駐滿帝國大使ノ承認ヲ經ベキモノトシ前記條約實施後直ニ協定セラレベキ行政法令ノ範圍ハ概ネ地稅、契稅、營業稅、法人營業稅、出產糧石稅、

木税、鑛業税、鑛業登録税、酒税、捲菸税、統税、商
業登記税、特許登録税、意匠登録税及地方税
並ニ工業所有權、度量衡、計量、鑛業、市場、畜産、
金融及專賣ニ關スル法令トシ營業税、法人
營業税並ニ地方税中房捐及戸別捐ヲ日本
國臣民ニ賦課スルニ當リテハ條約實施後
當分ノ内ハ駐滿帝國大使ト滿洲國外交部
大臣トノ間ノ協定ニ從ヒ輕減税率ヲ適用
スベク地方税中營業税附加捐ハ右輕減税率ニ
依ル本税額ヲ基準トスベク條約實施後直ニ適

用スベキ輕減税率ハ營業税、戸別捐及個人
ニ賦課スル房捐ニ付テハ原税率ノ四分ノ
一、法人營業税及法人ニ賦課スル房捐ニ付
テハ三分ノ一トス(條三)

(三) 前記滿洲國法令ノ日本國臣民ニ對スル適
用及執行ニ關スル司法手續ハ日本國臣民
ガ同國ノ裁判管轄權ニ服スルニ至ル迄ハ
日本國領事官ニ於テ領事裁判ノ一般準則
ニ從ヒ滿洲國ノ當該法令ヲ適用シテ之ヲ
行フベク其ノ言渡ニ係ル罰金、科料、過料又

ハ没收物ハ滿洲國政府ニ歸屬スベキモノ
トス(第三條)

(四)日本國政府ハ別ニ滿洲國政府ト協定スル
所ニ從ヒ遅クトモ明年十二月末日迄ニ滿
洲國領域内ニ於ケル行政警察ヲ撤廢又ハ
移讓スベク之ヲ實現スルニ至ル迄ハ前記
條約ノ規定ニ依リ日本國臣民ノ服スベキ
滿洲國法令中課税ニ關スルモノ及南滿洲
鐵道附屬地ニ於ケル行政警察ト關係アリ
テ豫メ駐滿帝國大使ト滿洲國外交部大臣

トノ間ニ協定シタル範圍ニ屬スルモノハ
之ヲ南滿洲鐵道附屬地ニ施行セザルコト
トシ滿洲國政府ハ其ノ警察制度ヲ整備シ
且日本側ノ關係施設及職員ヲ引繼グ爲メ
必要ナル準備ヲ爲スベク日本國政府ハ南
滿洲鐵道附屬地内外ニ於ケル日本國臣民
ノ課税負擔ノ均衡ヲ確保スル爲メ條約實施ノ
日ヨリ右附屬地外ニ於ケル滿洲國ノ國税
ト成ルベク同様ナル課税ヲ右附屬地ニ於
テ實施スベク又滿洲國政府ハ日滿兩國政府

ガ別ニ協定スル所ニ從ヒ右附屬地ニ於ケル南滿洲鐵道株式會社ノ土木、教育、衛生等ニ關スル施設ノ處理ヲ了スル迄ハ同附屬地ニ於テ地方税ヲ賦課セザルモノトス(第四條)

(五) 滿洲國政府ハ同國法令ガ南滿洲鐵道附屬地ニ施行セラルルト同時ニ豫メ駐滿帝國大使ト滿洲國外交部大臣トノ間ニ協定シタル所ニ從ヒ日本側ノ關係施設及職員ヲ其ノ現状ニ於テ引繼グベキモノトス(第五條)

(六) 滿洲國政府ハ同國法令ニ關スル同國當該官憲ノ行政處分ニ對シ日本國臣民ニ於テ不服アルトキハ之ガ改正ニ付適當ナル措置ヲ講ズベキモノトス(第六條)

(七) 本協定ハ前記條約ト同時ニ之ヲ實施スルモノトス(第七條)

第三 日滿兩國全權委員間了解事項

本文書ハ前記條約及附屬協定ノ施行ヲ圓滑ニスル爲メ其ノ二三ノ規定ニ關聯シ日滿兩國全權委員間ノ了解ノ形式ヲ以テ補足的取

極ヲ爲サントスルモノニシテ(一)條約第一條ニ關シ蒙古民族ノ共同利益地域タル未開放蒙地ニ於テ日本國臣民ガ土地ニ關スル權利ヲ取得スルニハ滿洲國當該官憲ノ許可ヲ要スルコト(辨二)(二)條約第二條ニ關シ滿洲國領域内ニ於テ現ニ日本人居留民團體ガ日本國臣民ノ教育事業ヲ經營シ居ルニ由リ滿洲國政府ハ駐滿帝國大使ト滿洲國外交部大臣トノ間ノ協定ニ從ヒ日本國臣民ノ教育事業ニ要スル費用ヲ毎年分擔スベキコト同政府ハ

其ノ現行租稅制度ヲ更ニ整備スベキコト同政府ハ同國法令ヲ日本國臣民ニ適用スルニ當リ日本國臣民ガ日本國ノ法令又ハ慣行ニ依リ現ニ享受スル權利利益ノ保護ニ付必要ナル措置ヲ講ズベキコト(辨三)(三)附屬協定第四條ニ關シ南滿洲鐵道附屬地内ト同附屬地外トノ一方ニ於テ生産セラレ他方ニ於テ消費セラレル物品ニ對スル消費稅ノ賦課徵收ニ關シテハ日滿兩國當該官憲間ニ於テ協定スベキコト(辨三)ノ諸項ヲ掲ゲタリ

第四 交換公文

本文書ハ日本國臣民ニ對スル滿洲國法令ノ適用ヲ圓滑ナラシムル爲メ日滿兩國代表者間ノ往復文書ノ形式ヲ以テ滿洲國政府ハ(一)日本國臣民ニ對スル課稅標準決定ニ付其ノ適正ヲ期スル爲メ當該稅務官憲ラシテ日本人居留民團體其ノ他適當ナル者ニ課稅上參考ト爲ルベキ事項ヲ諮問セシムベキコト(二)日本國臣民ニ對スル租稅ノ賦課徵收事務及日本國臣民ノ經營スル金融機關ニ對スル直

接監督事務ハ成ルベク日本人官吏ヲシテ之ニ當ラシムベキコトヲ取極メントスルモノニシテ本文書ハ之ヲ公表セズ

審査委員會ニ於テハ本件取極ニ關聯シ各般ノ事項ニ付テ質疑ヲ重ネ具ニ當局諸官ノ説明ヲ聞キタリ其ノ中特ニ重要ナル事項ニ關スルモノ左ノ如シ

(一)前敘ノ如ク本年七月一日以降帝國臣民ハ滿洲國ノ課稅ニ關スル行政法令ニ服シ滿洲國ニ於テハ帝國臣民ニ對スル租稅ノ賦課徵收

事務ハ成ルベク日本人官吏ヲシテ之ニ當ラシムルコトヲ協定セントス仍テ其ノ日本人官吏ノ配置ノ狀況ヲ當局ニ質シタルニ當局ハ昨年末ニ於テ滿洲國內各稅務官署ヲ通ジ日本人官吏合計二百七十六名ヲ配置シアリ今後尚必要ニ應ジテ之ヲ増員スルノ計畫ヲ有スト答辯シタリ又明年十二月末日迄ニ別ニ本院ノ詢議ニ付セラルベキ協定ヲ以テ帝國ノ滿洲國領域内ニ於ケル行政警察ヲ撤廢スベキコトヲ豫約セントス仍テ之ニ對スル

滿洲國側ノ用意ヲ當局ニ質シタルニ當局ハ同國ニ於テハ現ニ警察法令ノ改廢警察官吏ノ素質ノ改善日本人警察官吏ノ採用等ニ依リ警察制度ノ整備ニ努メツツアリ其ノ日本人警察官吏ハ昨年末ニハ總數三千九百餘名ニ達スル見込ナリ又帝國ノ行政警察撤廢ノ際帝國領事館及關東局ノ警察官吏總數四千八百餘名ハ之ヲ滿洲國ニ引繼ギ以テ同國ノ行政警察事務ニ當ラシムベシト答辯シタリ

(二)帝國ノ滿洲國ニ於ケル治外法權ハ逐次部分